



目 次

○白畑工場記	上	滿	田	辰	卯	生
○皇道と日蓮主義を讀みて	上	田	辰	卯	生	
○教報	上	田	辰	卯	生	
○寄附團費誌料領收	上	田	辰	卯	生	
聖訓摘要	小	林	一	郎	明	人
日蓮教學講座(第十五回)	小	林	一	郎	明	人
法華經講話(第十二講)	小	林	一	郎	明	人
記事	小	林	一	郎	明	人

第三十九年十二月號

昭和九年十二月二十日 第三十九年十一月號

財團統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ每ニ覺醒ヲ促シテ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ賛同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ振興ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ寄附氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

日生上人

實相寺御書

この中には摘出する所がありませぬ。

四條金吾御書

この御書は前に申した四條金吾が自分の領分を取上げられても厭はず信仰を貫いたといふ事と連續して居る事でありますから、序に御紹介して置きます。

日々の御出仕の御供いかなる事ぞ、偏へに天の御計らひ法華經の御力にあらずや。其の上園教房の來りて候ししが申し候は、江馬の四郎殿の御出仕に御供の侍二十四五、其の中に主はさて措き奉りぬ、主の身長といひ面魂、馬、下人までも中務の左衛門尉第一なり、天晴れ男やくと鎌倉童は辻にて申し會ひて候しと語り候。(繪詞遺文錄) 一六九五

これは日蓮聖人がいかにも愉快に考へられた事であつて、四條金吾の事は自分の事のやうに思つて心

配して居られるのであります。所がこの頃は主人が鎌倉幕府に勤めるに就いても、四條金吾に「お前も一緒に来て呉れ」といふやうな事で、今までは憎んで勘當をして叩き出してしまふと言つて居つたのが今度は復歸して前にも増して主人のお氣に入つて、金吾でなければならぬといふことになつて、日々の御出仕について何時もお供をするといふ事は、これは偏へに天の御計らひか法華經の御力かと非常に日蓮聖人はお悦びになつた、所がこの間開教房といふ——何れ日蓮聖人のお弟子でありませうが、その人が来て鎌倉の噂話を傳へたが、それは茲に書いてある通り、御主人江馬殿の御供が二十四五人ある中に、中務左衛門尉即ち四條金吾が一番ちやんと言つて皆が譽めて居る。その一番ちやといふのは何か一番ちやといへば、實に面白く書いてある。先づ主のせいとあるから身の長である、四條金吾はすらりとして脊が高い、中々立派な男ちやといふ譯で皆が譽めて居る。それからかほたましいといふから四條金吾の面魂が如何にも立派で一番えらさうだといふ。それから馬、乗つて居る馬もやはり四條金吾の一番良い。それから下人、金吾の伴れて居る末の家來、草履取までもえらさうに見える、何から言つても左衛門尉が第一である。「天晴れ男や」と鎌倉中の評判になつた。實にこれは日蓮聖人としては愉快な事であつたでせう、四條金吾が勘當せられて、乞食に成つても法華經への御布施と思召して、領分を取上げられても、女房の手を引いて家を出る時分に泣き悲しむやうな事があつてはならぬ、涙を流してはならぬ、思ひ切つて法華經の爲めに正義を通せと勵まされた、その四條金吾が今度は復歸して、今

の様に鎌倉に於て譽められたのでありますから、非常なお悦びであつたらうと思ふ。

同時にまたこれが日蓮門下の教である、唯だ信心さへして居つたら宜い、法華の信者と云つても皆弱りはたてやうな顔をして、腰の曲つた爺や婆ばかりが法華の信者だと言つてヒョロ／＼出て來ても駄目である。茲にある通り身長といひ面魂といひ馬といひ、十分に活躍した日蓮主義でなければならぬ。涅槃經にも説いてあるが、お釋迦様が信者を造るには、それはどういふ者でも皆憐れに思つて助けられる。鬼も助け鼠も助けるけれども、獅子を助け虎を助けなければいけないと言はれた。日蓮主義に集まる者も傷ついた鼠であるとか、脚を折られた鬼であるとかいふ者はかりではいけない、大きな飛び跳ねるやうな獅子や虎が來なければいかぬ。釋尊は「獅子の圍繞する所となれ」と言つた、これは實に面白い事である、日蓮主義者は獅子に取圍まれて居なければならぬ、これが大事な所だと思ふ。所が今でも市内のお寺などに行つて御覽なさい、鼠の傷ついたり猫の脚を折られたやうな者はかりが集つて居る。それでは宗教は駄目である、茲に現はれて居る通り、中務左衛門尉は身長も高い、面魂も立派である。馬も一番良いといふ、これが實に大きな問題である。「信心さへすれば成佛するのちや、この世は屈けて居つても宜い、愈々息を引取つたらボンと行くのちや……」それではいかぬ、現在に一つの名譽、目的といふものが無くてはいかん。お釋迦様の佛教は死んでからだけ助けるのではない、生きて居る時に人格を完成し名譽を揚げて、人間としての最高目的を達して、息を引取つたらモウ一つ完全な佛に行か

うとするのである。この世の中はいつでも宜い、善導和尚のやうに柳の木の上に登つて首を縊つてナンマイダーを唱へて死んだといふことは馬鹿者である。釋迦如來がお居でになつたらあんな者は第一番にお叱りになるに違ひない、釋迦如來はあの通り八十年の間大活動をなさつた、さうしてそれは決して乞食坊主を以つて甘んじて居つたのではない、釋迦自ら任じて居るでせう、あの傳道の途中に於て大勢の釋迦族の者が來て、「どうか左様な宗教の宣傳はやめて、國へ歸つて政治を執つて貰ひたい」と言つた時に、釋迦は何と答へたか、「俺は今なほ法王である、迦毘羅衛といふ一國の小さな王様ではなくして往いては全世界の法王と成る所のものである、今なほ我は王なり」と言ひました。それから愈々御涅槃の時分になつて、阿難が「どういふ工合に御葬式を致しませうか」と尋ねた所が「そんな事はお前が考へないでも宜しい、俺の信者の各國の國王が寄つて相談するであらう、十六大國の國王も皆驚いて集るだらうから、俺の葬式の事などお前は考へないでも宜しい」と言つた、阿難が「それでも一應は伺つて置かなければならぬから、どうぞ仰しやつて下さい」と言つた時に「そんなに言ふならば、教へてやう、我が葬式の法は轉輪聖王の法に據れ」と言はれた、そこが面白い所である。佛教といふものをヘナヘナした寒い本堂の角で慄へ聲をして居るものゝやうに考へて終つたのは間違つて居る、やはり阿育大王がなさつたやうに、又日本では聖德太子や桓武天皇や傳教大師のなさつたやうに、一國の風教の中輪に持つて行つて活動しなければならぬ、これは非常に大事な事であります。だから其處に名譽をこの人

生に置かなければいかぬ、「百二十まで生きて名を下して死せんよりは、生きて一日たりとも名を揚げんことこそ大切なれ」と日蓮は言つた、無闇に死ぬのを急いで、死にさへすれば宜しいといふやうな退嬰悲觀の宗教は日蓮の採らざる所で、生きて一日でも名を揚げるといふ現在に望を置き、さうして人生の用が濟んだその先きは皆成佛するのである。けれども成佛ばかり心配してはいかぬ、現在の活動が終れば無論成佛出来るといふのが日蓮主義の大事な所である。これは加藤清正などは餘程よく言つて居る「一生懸命忠義の爲めに働け、働いて愈々戦争に行つて死んだならばお釋迦様が救つて呉れる、だから死んだ先の事など心配せんでも宜い、一生懸命にやれ」と言つて居るがその通りである。少しも善い事をしないで唯だ死んだ先の事ばかり心配して、朝から念佛ばかり唱へて「ナンマイダー頼みます〜」カン〜……それでは駄目ぢや、そんな真似はせぬでも宜い、平生から本當の事をやつてさへ置けば、愈々といふ時にも何も悶へることはない、心に確乎不拔の信念がなく、何も善い事をして居らんで、唯だ「頼みます〜、ちよつとでも手が離れたら大變だ」……といふのでは駄目ぢやないか。これは實に私は大きな問題と思ふから、後日或る機會に詳しく論じて見たいと思つて居ります。

歸らむには第一心に深き用心あるべし。(補遺文後)

これは四條金吾が斯様に主人に重く用ひられるやうになつたに就いても、反對の者共がいろ〜と附狙うて居るから、能く用心をしなければならぬといふので、いろ〜家庭に歸つての用心などを細々と

警告せられました、その點も非常に大事と思ふ。不惜身命の決心をして居るからと言つて、さう無闇に死んで宜いといふものではない、詰らぬ事に命を失つては惜しい事であるから、益々身を大切にしていやつて行かなければならぬ。

かへりて大懺悔あるならば、助かるへんもあらんずらん。いたう天の此の國を惜しませ給ふ故に、

大なる御諫あるか。(維新遺文録)

これも非常に愉快なお言葉であります。諸天善神がこの日本の國を惜しみ給ふが故に、警告を與へて天變地妖等が起るのである、先づ内に大懺悔をするならば、この國が助かると言はれた。この大懺悔といふ事は愉快なことであり、これは上皇室を始め、政治家でも教育家でも一切の人々が心を一つに新たにしなければならぬと私は考へます、本當の事は今日時至つて居ると思ふ、大隈侯と言ひ山縣公と言ひ段々元老も年を老つて死なれるし、前には一國の總理大臣が東京停車場に於て暗殺されたりした。世の中の狀態にした所が、中々混沌たる光景になつて居る、今日あたりも普選運動といつて芝公園あたりを騒いで居るでせう、騒ぐのが宜いか取締るのが宜いか知らぬけれども、やはりその間に一國の民心が乖離しつゝあるといふことは恐ろしい事である。普通選舉は之れを實行したからと言つて決してうまく行かぬ、實行したからといつてもいろいろなワイの事になつて、政治がうまく行くものではない、と言つて之れを許さなければ毎年々々騒ぐ、何故許さぬかと云つて騒はぐ、許せば又變な事

をやる、許さんでもいかん、許してもいかんといふやうな眞に困つた問題である。眞に今日は國家の容易ならぬ秋である、外は華府會議に依つて日本の立場がどういふ工合になつたか、表面平和の狀態でありませうけれども、中々そこは考へねばならぬ問題がある。それでありませうから今日は國民が大懺悔をしなければならぬ、その大懺悔はどうするかと言へば、宗教の信仰などは無論この正しき信仰に來るが宜し、それからいろいろと人心が墮落して居れば、その墮落したる精神を第一に喚止めなければならぬさうして高潔なる精神に進み、いろいろの弊害があるならば、怠り根性が生じて居れば動勉にかへるが宜い、驕奢の精神になつて居るならば、又約やかなる生活に復るが宜しい。今日はいろ／＼の弊害が起つて來て居る、この弊害といふものを一つ大懺悔をしなければならぬ。私はこれが爲めには三日四日一切の事を休んでやつても宜からうと思ふ、帝國議會が三日位休んだつて何も損も得もない、代議士が人を敵つたとか敵らぬとか、山縣さんの國葬に反對演説をしたとか、したが爲めに又騒いだとか、そんな事が何であるか、見戯に等しい事である。新聞に書いて出すだけでも手數のかゝることぢやないか、そんな事を印刷する、さうして配達する、それを又讀まなければならぬといふ、厄介な事である。それでこれは「大懺悔」と日蓮聖人が言はれた通り、誰が悪い、彼が悪いといふことはないから、上は御皇室を始め、下は國民全體に至る迄、一つ綺麗なる精神にかへつて、さうして日本の國の益々榮えて行くやうに、拗けた精神を捨ててやうにしなければならぬと思ふ。日蓮聖人はそれをやるならば日本

の國は助かる、さうして榮へると言ひました、この言葉は忘れてはならぬ事である、簡單な聖訓でありますから、諸君も御記憶を願ひたい。

松野殿御返事

野邊に捨てられなば、一夜の中に裸になるべき身を飾らんがために、いとまを入れ衣を重ねんと願む。命終りなば三日の内に水と成りて流れ、塵と成りて地にまじはり、煙と成りて天に登り、跡も見えず成りぬべき身を養はんとて多くの財を蓄ふ。此の理は事古り候ひぬ、但し當世の體こそ哀れに候らへ、日本國數年の間打ち續き飢渴ゆきて衣食たへ畜類をば食ひ盡し、結句人を食う者出來して、或は死人、或は小兒、或は病人等の肉を裂き取りて、魚鹿等に加へて賣りしかば、人はれを買ひ喰へり。此の國存の外に大惡鬼となれり。(續國道文錄)

實にこれは日蓮聖人の口づから聞くやうな氣持がするのであります。「野邊に捨てられなば一夜の中に裸となるべき身」といふのは、どんなえらい者でも死んだといふ事になれば、どんなに佳い衣服を着せて置いても火葬場に持つて行つて焼いてしまふのである、或は火葬場などでは、夜になると蓋を開けて隠亡が綺麗な着物などを剥してしまつて「焼くのは勿體ない」といつて素ッ裸にして焼いてしまふといふ事でありませう、東京あたりでも時々背後の方から戸を開けて出したといふ事を聞いて居る、今では

どうか知らんけれども、どうせ着て居つた所が焼けるのであるから同じ事である。そこで一度息を引取つた時には實に詰らぬこの身である、然るに生きて居る間この身のことばかり考へて居る、飯を食はしたり衣服を着せたりして苦勞をして居るけれども、抑々自分といふ者はこの身ではない、息を引取つたら今度は魂といふものが自分である、その魂の行衛の方に就いては何も準備してやつて居らない、身の方のことばかり準備して居る、それを日蓮聖人が言ふのである、これは凡夫として如何にも淺ましいことぢや、吾々もその事に就いては常に反省をしなければならぬと思ふ。魂と一緒に行くものは業である、善業惡業といふだけがお伴をするので、あとのものは何も附いていかん、幾ら金庫に金を入れて置いても、金庫を提げて行く譯にはいかぬ、どんな立派な家を拵へてもその家に居る譯にはいかぬ。餘り家などを澤山拵へて置くと、却つて邪魔になる。山縣さんなども小田原にも家があり、麴町にも家がある、京都にもあるでせうが、愈々今度堯くなられたならば三つも四つも家があつて困る譯でせう。所が生きて居る間といふものはそんな事にばかり骨折つて居る、さうして兎角人間は功德善根といふ事を忘れ勝になる、「この理事古り候ぬ」で佛教をやる者はその位の事は始めに考へて置くべき事である、今更ら申すべき事ではない。殊に今の日本の有様は飢饉疫病が流行つて、食ふ物は無くなつて人の肉を食ふやうな有様になつて居る、これは鎌倉時代の光景實にこの通りであつたので、丁度今の露西亞のやうな状態であつたのであります。それ故に洵に現在の生活も幸福が得られなくなり、可哀さうな事だと

いふ事をお書きになつて居る。

棧敷女房御返事

これは極く短かいもので、何も引く所がありません。

三澤 鈔

これは三澤殿に送られた御書で、非常に大事な御書であります。

又法門の事は、佐渡の國へ流され候ひし巳前の法門は、唯だ佛の爾前の經と思召せ、此の國の國主我と代をたもつべくば、眞言師等にも召し合は給はんずらむ。爾の時まことの大事をば申すべし、弟子等にも内内申すならば、披露して彼等知りなんず、さらばよも合はじと思ひて、各々にも申さざりしなり。而るに去る文永八年九月十二日の夜龍の口にて頸を刎ねられんとせし時より、後ふびんなり。我につきたりし者共に眞の事をいわざりけると思て、佐渡の國より弟子共に内々申す法門あり、此れは佛より後遺葉、阿難、龍樹、天親、天台、妙樂、傳教、義眞等の大論師、大人師は知りてしかも御心の中に秘せさせ給ひし、口より外には出し給はず。其の故は佛制して云く、我が滅後末法に入らずば此の大法いふべからずとありし故なり。日蓮は其の御使にはあらざれども、其の

時刻にあたる上、存外に此の法門をさとりぬれば、聖人の出でさせ給ふまで先づ序分にあらく申すなり。而るに此の法門出現せば、正法、像法に論師、人師の申せし法門は、皆日出てて後の星の光、巧匠の後に拙きを知るなるべし。此の時には正像の寺堂の佛像僧等の靈驗は皆消へ失せて但此の大法のみ一圓浮提に流布すべしと見えて候。各々はかゝる法門にちぎり有る人なれば、頼母しと思召すべし。(繪圖遺文録 一七〇五)

『法門の事』といふのは教でありますが、日蓮がいろ／＼書いたり話したりした事に就いて、佐渡の國へ流されし巳前の法門は、唯だ佛の爾前の經と思召せと言はれた、佛の爾前の經といふのは、法華經より前の『未顯眞實』と『無量義經』で言はれた、未だ眞實を顯はさないといふのが爾前の經といふのである。それ故に日蓮が佐渡の國に流されない巳前に言うた事は、皆そこに方便が混つて居るといふことを能く知らなければならぬ、それは何の爲にさうなつたかといへば、日蓮聖人の考へでは『公場對決』といつて眞言と問答をして、一舉にして眞言宗を弱らせてしまはなければならぬと考へられて居つた。それには始めから眞言宗の驚くやうな大事事を言うて置いてはいけない、その大事の事とは何か、佐渡の國から内々書いて送るといふのは『開目鈔』である、開目鈔は主師親の三徳から起つて、久遠の本佛を顯はされた。所が眞言宗は大日如來に依つて、さうして大日經の事から印、眞言といふやうなことを言ひ出して、遂に慈覺、智證等の天台の學者も眞言に流れて行つたのである。日蓮聖人はそれを憤慨

して居つたのでありますから、これは一擧にしてやつてしまはなければならぬ、けれども大事の壽量顯本の佛の事を早くから言へば、彼等が驚いて問答に來ないだらうといふので、その事を一切言はずに於いて、唯だ南無妙法蓮華經を唱へるといふやうな淨土門に似たやうなことを言つたり、又天台の觀念のやうな事を言つたりして、眞言宗を釣つたのである、「そんな事ならば」といふので眞言が出て來てさうして公場對決をして日蓮を問まさうとした時に、日蓮は「法華經の壽量品に曰く」といふので、開目鈔にある事をズツと擧げて、一擧にして眞言宗を參らしてしまふ積りであつた、それを茲に日蓮聖人が自ら申して居られる、これを味はなければならぬ。吾輩が何も想像していふのではない、法門の事は佐渡の國に流された已前の法門は、唯だ佛の爾前の經と思召せとはつきり書かれて居る。それは何の爲めだといへば、一大事の事を早くから言つたならば「弟子等にも内々申すならば、披露して彼等知りなんす」——眞言の方がえらさうな事を言つても駄目だ、こつちはこんなえらい物があるぞと言つて、弟子等がボン／＼いふと、向ふでも「はてナ」と考へて公場對決に遊げてしまふ、さうなつては大事であると思つて弟子共にも言はずに居つたけれども、文永八年九月十二日龍の口に於て頸を切られるといふ時に考へた、眞言をやつ／＼けやう／＼といふ事の爲に一大事の法門を言はずに置いて、若しも日蓮の頸が飛んでしまつたならば、眞の大事を言はずに終らなければならぬ、今度佐渡に流されても、流すといふのは表面で、佐渡ヶ嶋に於て殺さうといふ目的が彼等にあることを日蓮聖人は知つて居る。それを眞

言との對決といふ事を目的に置くが爲に、大事な事を弟子、信者にも言はずに終つては洵にふびんと思ふが故に「内々弟子共に申す法門あり」といふので、十月二十八日に佐渡に着くと、いきなり筆を執つて、かへる年の二月雪中に記して有縁の弟子に送られた、それが「開目鈔」である。それ程の一大事の開目鈔といふものを、法華の信者が聞きたくも思はないといふのは、どうも薄はけ極つたことぢやないか。この眞の大事といふものと「唱法華經題目鈔」などにある「一期生にただ一遍なんぞ南無妙法蓮華經」といふやうな事と混同して居るからいかん「佐渡已前の法門は佛の爾前の經と思召せ」であるから「開目鈔」が眞實を發揮したものである、この顯本法華宗の統一團の講壇といふものは其處に光がある本當の事を言つて居る、その意味が洵にこの御文章に能く現はれて居る。

(以下次號)



日蓮教學講座 (第十五回)

文學士 河合 陟 明

- ★ 其の國土に於て此經有りて雖も未だ曾て流布せず、捨離の心を生じて聽聞せん
- ★ ことを樂はず、亦供養し尊重し讚歎せず、四部の衆、持經の人を見ても、亦復
- ★ 尊重し乃至供養すること能はず。遂に我等及び餘の眷屬無量の諸天をして、此
- ★ の甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味に育き、正法の流を失ひ、威光及び
- ★ 勢力有ること無からしむ。惡趣を増長し、人天を損滅し、生死の河に墜ち、涅
- ★ 槃の路に乖かん。世尊よ、我等四王並びに諸の眷屬及び夜叉等、斯の如きの事
- ★ を見て其の國土を捨て、擁護の心無けん。既に捨離し已りなば其國に種々の災
- ★ 禍有つて國位を喪失すべし。(金光明經)

第一章 日蓮聖人出現以前の國情 (續)

而てこの眞言宗の思想はしだいに墮落して現世佛
 教、新轉佛敎となり、佛敎の根本的特質たる道義の
 法、即ち天地人を一貫したる道德的大規律を忘るゝ
 に至つた。もとより宗教が現實肯定的となり、永遠

生の希望より更に立歸つて現實生の遷善美化に進む
 といふことは、宗教信仰の理法からいつても正しき
 進歩發展であり、且つ宗教哲理の上からも深い根底
 が存するものであるが、(實在の絕對性に關する教
 理的發展としての本覺法門)しかしそれが一步誤
 つて迷信的祈禱に陥る様になれば、宗教一切の崇
 高なる感化がこれによつて滅びることゝなるのであ
 る。人々は自分の願望の正邪を反省することなく、
 唯だ神佛にすがり祈禱に依頼し、これによつて願望
 を叶へようとした。

しかのみならず朝廷に於かせられても何か事ある時
 又は事を起さんとする時は、必ず眞言師に祈禱せし
 められた。實に眞言の祈禱佛敎は、當時の政治に對
 して一大背景を爲し、奈良朝の弓削道鏡時代に於け
 る政教混淆の一層具體化したるものであつた。然も
 大義を誤れる信仰より出でし祈禱には更にその効果
 なきのみならず社會の鬩譯紛亂は益々甚だしくなり

來り、時代はいはゆる末法とつなげて、教はあれど
 も効力はないやうになつて來た。『鬩譯堅固、白法
 隱沒』と佛陀の豫言せられしに違はず、親子兄弟や
 主従の間にもまでも戰が始まり、其他人世の悲惨なる
 事實が相次いで起つて、社會は各階級を通じて縦に
 も横にも憂悲苦惱に充たされるやうになつた、眞言
 思想の特色たる『即事而眞』『煩惱即菩提』或は『即
 身成佛』の觀念または念願が、その理に反して現實
 悲哀の人生に求められざるに至るや、人はいづこに
 かその解決の地を求めねばならぬ。

もとより人生には苦惱煩悶はつきものであるが、
 その當時は特に澆季の世として末法意識は人々の心
 を捉へ、しかも現世の欲望が満たされざるや、人は
 來世に希望を懸け、かくて來世の淨土や死後の幸福
 をひたすらに願ふやうになり、こゝに法然や親鸞の
 念佛の信仰が非常な勢で人々を醉はしだすに至つた
 しかも法然や親鸞の教は、眞言よりも更に甚しく佛

法の大義名分はおろか、國家の事などは考へてもをらぬ。

諸君！念佛門の思想信條を見よ、彼等の元祖たる法然の選擇集には五種の正行と兼行とを分けて、阿彌陀經の外は讀んでならぬ、阿彌陀佛の外は一切禮拜したり讚歎したり名を稱へたり觀察したりしてはならぬといふ、従つて佛法の根本たる大恩教主釋尊すら全く捨て去るやうになつたは言ふまでもない。

日蓮聖人が最初十七歳鎌倉遊學の首途に於て、帷子の里といふ處（今の程ヶ谷あたり）に宿られた時その宿屋の主人が物もあらうに法華經を解き散らして壁貼りとし、釋尊の尊像を子供が玩具にして足で蹴つたりして居つたといふやうな有様であつたのである。聖人驚いてその故を問ひ、懇々として誠められたのでありますが、しかも聖人の折伏（相手の邪業を破り折きて正法に來り伏せしめる）の思想は實

にこの時に發したのである。日蓮聖人はこの帷子の里に於て法然の主張は甚だ誤れり實に怪しからぬといふことを、その時深く心魂に徹し、後年正法宣教のまつ先に、「法然といへる者あり」と筆誅の劍を揮はれたのである。

諸君！抑も心靈界の大義名分と、君國の大義名分とはその軌を一にする。兩者は同一源泉より進り來たるところの天地に磅礴たる正大の靈氣である、奪ふべからず易ふべからず、凛烈貫すべからざる浩然の氣であるのである。かの幕末尊王の志士、高山彦九郎が、勤王の志を懐いて京都に上り、等持院に至りて足利高氏の墓を土足にかけ、その罪の條々を算へあげて「逆賊高氏！」と罵り蹴り倒し、而も三條橋上に於ては頭を地にすりつけて皇居を遙拜し「草莽之臣高山彦九郎」と熱淚禁ぜざりし——そこに、我等日本國民の精神を永久に刺戟するところのものが宿つてをるのである。

果せる哉、法然・親鸞等の念佛信仰は、畏れ多くも我が國祖天照大神始めもろ／＼の神明を崇敬禮拜することすら悉く以て雜行となし、信徒をしてこれをも捨てしめた。その勢の趨くところ、皇室に對してすらいかなる感を抱くに至るか、是もとり問ふを要せざるところであらう。朝廷これを禁じたまひて論言頻りに下りしも、その後彼の門徒勅命を憚らず、いよ／＼専ら念佛の行を修し、佛神を崇めず宗廟を敬はず、況んや孝養報恩等の世間的善事に於てをや。

弘法・法然・親鸞等は、或は世間的には智者であつたり、または宗教の或一面では新機軸を出したやうにも考へられるが、しかしながら佛教の大義名分より見、はたまた君國の大精神より見來たるときは斷乎として彼等は叛逆者である。刹へその思想の淺窳低劣なる、そも／＼何を以て彼等を辨護せんとするか。

かて、加へて戦亂の世、正邪善惡を蔑視し一切人事を空無する禪宗思想は、その一種直截簡明の氣風に伴つて、主として武人の間に弘まりだした。彼の宗はまた慢見の鼻を高くして佛教を僻解し、一切の經々を月を指す指とし、しかも月そのものをも捉へ得ずして、諸佛を敬せず覺者の實在を知らず、たゞ「己れ佛に均しと謂ひて」、得々として我見邪見に陥り遂に「毘盧（佛）の頂上を踏んで行く」といふが如き暴言を吐き、釋尊の尊像を尻の下に敷くとか、聖像を焚ひて髻を起り、聖經を以て尻を拭ふに至る、咄！不届者その亂行何ぞ言ふに忍びんや。これ全く經にいはゆる天魔のしわざにして、思想的には民主主義の惑源であり、一切尊敬すべきものを認めずして、萬古尊嚴なる皇統を奉戴し來れる君主主義の我國とは到底相容れず。

否それどころではない、抑もかの保元・平治の亂に、從來公卿の勢力家に頼られし例を破つて、朝廷

が始めて禁闕守護の近衛府なる源平二家に援助を乞ひたもうてより、こゝに武士階級は漸く勢を得るに至り、「力は正義なり」との觀念は間もなく浸潤し來り、つひに平清盛に至つては、いはゆる天日の西に没するを扇返さんとするほどに、「力の權化」「強者の權利」は、その絶頂に達して、己が意に適はざる者は天朝の御稜威も神佛の法力も、遠慮會釋もなく斥け果て、遂に後白河法皇を鳥羽殿に幽閉し奉り、廷臣の三十餘人の官職を悉く剝奪し、南都七大寺を焼打し、至らざるなき横暴の限りを盡したが、やがて驕る平家久しからず、源氏の一門に攻め寄せられて、平家の一門は清盛の女建禮門院の御子幼き安徳天皇を奉じて西海に走りしも、遂にははれはかなく屋島・壇の浦に海底の藻屑となり果てたのである。しかもこれを攻めし木曾義仲等がまた京都の朝廷に對する亂暴狼籍は一方ならず、彼がまた公卿四十餘人の官位を褫ひ、法皇御所を攻めて圓

慧法親王の御首と天台座主明雲大僧正とを曝し首にしたる、あゝ「權力」「實力」「武力」の前には神佛も皇室も、彼等の眼には更に映ぜなかつたのである。さりながら隆替興亡は走馬燈の如く、清盛も義仲も、朝威を冒せし彼等の輩は、或は大熱病に狂ひ死に、死し、或は粟津に敗北するや、範頼・義経は一族義仲を亡すのみならず、宿敵平家を長驅西海に追ひ、勢に乗じて、兄頼朝の命に違ひ、安徳天皇の御座船にまで手を掛け遂にこれをして入水せしめ奉るに至つた。神器また海に沈み果てつ。頼朝これを怒り義経を討つと稱して、大江廣元の言に聽いて全國に守護地頭を置き自ら六十六ヶ國總追捕使となりて、遂に幕府を鎌倉に開くや、こゝに我が皇朝史上の一大變態としてあさましかりし事なりつる。政權兵馬の權を武門に握らるゝに至り、爾來七百年間下尅上の叛逆政治の端を造り、然も平家は、なほ外孫にましますとはいへ天皇を奉じて天下に號令し、

その宮廷の地に據つたのであるが、頼朝に至つては全く武人本來の分を没却して、京都を離れて鎌倉に獨立し、自ら征夷大將軍と誇稱し、世を擧げて國主國王の如くに思はしめ、一國二主の形實にこゝに造られ、この源氏また三代三十年に滿たすして亡ぶるや之に代りし北條一門に至つては、これらの風潮と相呼應する禪宗思想と結びついて、もはや神明崇敬の念もなく、武力を有する彼等の輩は、關東武士の田舎者の没曉漢を狩り集めてその統領となり、源氏に代つて更に武門政治をつゞけ、すべて何事も力を以て解決せんとするに至り、君國の大義を辨へず、朝廷をして空しく虚器を推せしめ奉り、種々の策を弄しては民衆を手なづけて民主政治を行ひ、租税を免する等の多少の恩を賣つては幕府に靡かしたあゝ眞實の教一度び廢るゝやその弊かくの如し、人を驅つて功利主義に走らしめ、世を擧げて沒義道に陥らしむ。

見よ當時の民衆の思想は——要するに我等に都合よくやつて呉れさへすれば誰か治めてもよい、天子様であらうが、幕府であらうが誰でも構やしない、といふ氣持であつたのである。あゝ皇國の大義名分はもはやいづこに存するか。北條の輩が上に朝廷の御威徳を抑へ、下に民心を收攬して、即ち多數心理さへ巧く誤魔化せば、我國の大義名分はどうなつてもよいといふ考と、低級暗愚なる民衆の功利主義とは、全く日本人たるの正念を狂はして世を擧げて支那人と化せしめ、國體を忘れ、皇室を輕んじ、君臣の大義を無みし、國家破却の恐るべき魔想がこゝに醸されてゐたのである。

(續)

法華經講話

(第十二講)

文學士 小林 一郎

妙法蓮華經序品第一 (承前)

前回には、釋尊が眉間の光を放たれたことに就て彌勒菩薩が疑を發したに對して、文殊菩薩が、過去の世に於ての佛の世に出て教を説かれる順序を話された、その途中までを讀みました。前にも申したやうに、すべて佛の教といふものは、定まつた道筋があつて、どの佛の與へられる教も、大體に於ては一致して居ると考へられて居る。この娑婆世界、即ち吾々の住んで居る世界に現れて、吾々に直接教をお與へになつたのは釋迦牟尼佛といふ佛であります。佛の教といふものは皆一致して居るものだ。それはどういふ風に一致して居るかといふと

小乗 大乘 實權

といふ順序で、一番初めに小乗といふ低い方の教を説いて、その次に大乘といふ深入りした上の方の教を説く。その上の方の教の中にも權と實とある。權といふのはかりの教、まだ本當に佛の心持をスツカリ打明けない教、實といふのは佛の心持を、自分の覺つた通りを打明けて説かれる。この道筋は、どんな佛でも皆斯ういふ道を執つて來られるのだといふことが考へられて居る。吾々が人に物を話すのもその通り、やはり初めは口元の方から行つて、だん

だん深入して一番終ひに自分の思ふ通りの要點を言ふ、といふのが普通の順序です。他人の家へ行つても、初めからイキナリ用件は言はない、『どうもお暖かになりました』とか『昨日は雹が降りました』とか、『雷が鳴りました』とか言つて居るが、別に雷の鳴つた報告に行つた譯ではない。先づさういふ事を言つて置いて、それからだん／＼に用件を話す、これは誰の話でも同じ事であつて、佛様が吾々にお説きになるのでも、いきなり初めから自分の覺つた所をその儘にぶつ／＼に説かれた日には、聴く方がわからないから、それで先づ低い方から高い方に、低い方から深い方に入るといふことは當然の道であります。

そこで注意しなければならぬのは、それなら低い方の教を説く時に、いゝ加減な態度で説くかといへばさうではない。そこが大事な所である。低い方の教を説くのは、相手が低いから低く説くだけけれど

も、その説く時の心持は極く深い事を考へて居て説く。それでなければいけない。相手がつまらない者だからいゝ加減にやるといふやうなことでは教にはならない。どんなつまらないやうな事を言ふのでも、佛様は十分にお考へになつて、さうしてその今説くことが手引となつて深い所まで入つて行くやうな、その筋道を考へて居て説かれる。そこが非常に尊い所である。それで低い教は價值が無いといふ風に思つてはいけない。チョット言葉の上に表はれた所はつまらないやうなことを言つて居るが、そのつまらない言葉を縁として、幾らでも深入が出来るといふやうに考へられるのであります。

お經の中では阿含といふのが所謂小乗だと言はれて居ります、けれども吾々がこの阿含を讀んで見ると、決して低いものではない。成程チョット表面だけ見ると、嘘を吐いてはいけないとか、泥棒してはいけないとかいふやうな、普通の事を言つて居られ

るのだけれども、さういふ事を言つて居る間に、モット深い意味がそこに含まれて居る。であるから淺く見れば淺い教でありますけれども、深くこれを味はうと、その淺いやうな言葉の中に、非常に深い意味が含まれて居るのであります。そこが、非常に尊い。

前回にお話した所にその事を言つて居る。「初善中善、後善」とあつて、初めのも善い教だが、中頃のも善い教だ、後の方も善い教だといふのはその事でありませう。初め極く低い事を説く時から、佛様の心の中では、その聴く人をだんふ、教へ導いて、佛様御自身と少しも變らない者にしてやらうといふ誠心を籠めて説かれるのでありますから、初めから善い教を説かれる。中頃も無論善い、終ひになれば、所謂眞實の教、佛様のお心持をその儘打明けられるのでありますから勿論結構である。それでその言葉は奥深く遠い。眼の前の事を説いて居るやうでも、

「聲聞」といふのは聲で聞くと言つてある通り、耳に佛の教を聞いて、その佛の教に依つて世の中に執はれない心持をつくること、即ちこれは主として無常を感ずる。無常といふのは、お互が今眼の前いつ迄も有ると思つて居るものは、實は一時的のものでございふことを本當に覺らせる。それが無常を感ずるといふことであります。花が咲いて綺麗だと思ふけれども、それは直に散つてしまふ。月は盈ちて月夜で綺麗だと思ふけれども、それはやがて虧けて行く。金がある、位がある、地位があるといつて誇つて居るけれども、その金とか位とか地位とかいふものは永久のものではない。金持が直ぐ貧乏になることもあるし、地位の有る人が直ぐその地位を失ふこともある。人間の姿、容が美しいと言つて居るけれども、いつ迄も美しく居はしない。年老れば皺だらけになつて汚なくもなる。斯ういふ事を徹底的に教へて、さうして人間の満足といふものはさういふ

遠い先の事までも意味する言葉をお説きになつた。さうして「純一無雜」といつて、まじりが無い、佛の覺つたお心持から出た言葉である。その中にいふ加減なつまらない意味などは、少しも入つて居はしない、斯ういふのであります。それであるから「梵行の相」と言つて、煩惱を離れた、迷ひを離れた本當に清らかな行ひをし得る。その意味がその言葉の中に含まれて居る。であるから初歩の所でも十分尊い、ましてやそれが奥の方へ行きますれば、尙更以て味へば味ふほど深い意味がその中に含まれて居る譯であります。

所でその佛の教を聴く人を類に依つて別けると、聲聞と緣覺と菩薩と、斯う三種に分れる。初めは先づ聲聞、それより一段進んだものが緣覺、それよりモウ一段進んだものが菩薩、斯うなる譯であります。その三段の教をこれから以下に一通り述べてあります。

外界の事に依つて得られるものではない。外界に満足を求めようといつても、その外界の様子といふものは始終變るのである。だから本當の満足を求めようと思へば、自分の心の中に満足を求めなければいかぬ。自分自身の心を建直して、如何なる境遇にも如何なる事情にも適應し得るやうな心持を作つて行かなければならぬ。外に向つて求めてはいけないといふことを本當に教へる。それが所謂無常の教であります。

だから無常の教といふものは、世の中はつまらぬ死んでしまへといふやうなそんなものではない。世の中に執はれて居ればそれは無常だぞといふので、執はれない心持を作れば、どんな境遇の中でも安らかに居られる。斯ういふ事を教へる。それが所謂無常の教であります。佛教は無常を説くから「厭世教だ」ナンといふことを西洋の人などは言つて居るけれども、それは見當違ひの話であつて、成程厭世的の事

も言ふけれども、厭世的の事を言ふのは、淺薄な心で世の中を渡ると世の中はつまらないぞ、だから心の立て方を直せば世の中は愉快だぞ、斯ういふ事を言ふのであつて、たゞ世の中は嫌やだから世の中を離れろといふことを言つて居る所は一つもありはしない。佛教の何處を探つて見たつて、たゞ世の中を離れろといふことを言つて居る所はありはしない。この離れろといふ中に、つまらない心持を以て暮して居る世の中、それを捨てろと言ふ。心の土臺を建直したら宜い。金がなくてはならぬと思つて居ると金が無くなると淋しくなる。有つても無くても平氣な心持で居れば、有る時は有る時で暮して行く、無い時は無い時で暮して行く。美味いものを食はなければ生きて居られないといふことになる、不味いものばかり食はされると首でも縊りたくなる。併し美味いものが來たら美味いものを食ひ、不味いものが來たら不味いものを食ふといふ心持で居れば、ど

んな境遇でも平氣で居られる。だから世の中は無常だと教へるのは、無常だから廢めろといふのでは無い。心が迷つて居るから無常なんだ。その心の根本を建直せば、世の中はどんな境遇でも安らかに送れる、斯ういふ事でありませう。

それを教へられて『成程さうだ、人生に執はれない心持を作らう』斯ういふ氣になりましたものが、佛のお弟子の中ではマア一年生です。それを『聲聞』と申します。佛の教を耳に聞いて聞いただけで『世の中は無常だからそんなつまらない心持を廢めよう』といふ考を起す。これを聲聞と言ふ。

それからモウ少し進んだ人になると、たゞ聞いただけでなしに、自分が日常出會ふ事柄に思ひ合せてその深い意味を覺る。それを『緣覺』と言ふ緣に依つて覺る、緣といふのは自分の毎日出會ふ事柄に依つて『成程』と斯う思ふ。自分が毎日見る事、聞く事を思ひ合せて『佛様の仰しやつたのは此點だナ』

斯ういふやうに緣に依つて覺る。日々出會ふ事柄に依つて自ら佛の教を思ひ合せて『茲だナ』と覺つて行く。それだけの機根の有る者を『緣覺』と言ふ。だから聲聞も緣覺も、畢竟淺薄な生活をして居れば世の中は無常だ、その無常な世の中を離れてモウト深い生き方をしなければならぬといふ覺りを得たものです。

併ながらさういふやうに世の中を無常だと覺つただけでは、それでは人生に意味がなくなる。だからその覺りが出來たらば、更に深入りをしなければならぬ譯である、若し人生に執はれない心持だけを作ることになると、生きて居ることの意義がわからなくなつてしまふ。どつちでも宜いのだ、金が有つても宜し、無くても宜い、『大きな家でも宜し、小さい家でも宜い』『人が讚めても宜し、讚めないでも宜し』斯ういふ事ばかりでズツト押通して行くと、『生きて居つても宜し、生きて居なくても宜し』

『迷つても宜し、覺つても宜し』どつちでも宜しといふことになつてしまつて、まるで人生に意味が無い。だからさういふやうな執はれない心持を作るといふことは、更にモウ少し深入した覺りを開く準備がなければならぬ。たゞ執はれないだけでは仕様が無い。どつちでも宜いだけなら、生きて居る意味はありはしないから、何しに生きて居るかわからない。

そこで執はれない心持を作つて後にどうするかといふと、人間といふものは自分一人が生きて居るのではない。だから自分といふ此の小さい者に執はれない心持が出來たならば、自分の骨折が周圍の人の幸福を増し、周圍の總ての人の苦勞を減すことに役立つことを悦びとしよう、斯うなつて來る筈であります。そこが所謂菩薩の行です。だから菩薩の行は慈悲を主にする修行です。慈悲といふのはつまり自己の存在が周圍の人の役に立つといふ心持、それが慈悲です。そこで初めて吾々は生きて居る甲斐が有

る。自分の身は五尺三寸か五寸か、六尺ありはしない、自分の一生は六十年か七十年か、百歳まで生きられるものではない。併しその六十年、七十年の生活に於て自分の爲した事が、たゞ自分一人の活動ではなくして、自ら周囲の人の喜びを増す結果となり、自ら周囲の人の苦しみを除く結果となつて、さうして縦ひ自分の身が朽ちても、自分の命は終つても、その骨折つたことは永久に朽ちないで滅びないで後まで遺るのだといふことが捉へられたら、そこで初めて生きた甲斐が有る譯です。何しに生きて居たかといふことの意味が有る。その心持を作ることが所謂菩薩の行である。それがだん／＼進んで行つて、總ての人間の爲に慈悲を加へようといふことになれば、所謂大慈大悲で佛の境界になる。吾々はいきなり佛のやうには行かぬから、小さい範圍でも慈悲の心持をもつて周囲の人の喜びを増すやうに、周囲の人の苦しみを除くやうにといふ氣分を以て、世

の中を通つて行かなければならぬ、その心持を養ふことが菩薩の修行です。これは心一つの問題でありますから、さういふ心持になれば出来るのであります。

今こゝで過去の佛が教をお説きになつた順序がやはりその順序で述べられてあります。

聲聞を求むる者の爲には、應せる四諦の法を説きて生老病死を度し、涅槃を究竟せしめ

(爲す求聲聞者、説應四諦法、度生老病死、究竟涅槃)

聲聞を求めるといつて、佛の教を聞いて世間に執はれないやうな心持を作りたいといふ、佛の修行の一年生卒業クライの者、その程度の者の爲には、それに相當する四諦の法といふことをお説きになる四諦といふのは

四 諦 集 苦 諦

滅 諦

を言ふので、これを一口に「苦集滅道」と申します。「諦」といふ字は徹底的の教といふ意味です。いゝ加減なやり方をしては皆眼が醒めない。そこで確りと徹底的に根本から説く。それが諦であります。諦は「あきらか」といつて徹底した意味であります。

先以て「苦諦」を説く、苦といふのは不満足といふ意味であります。少しも教も道も辨へないで、いゝ加減に世の中を渡つて居る人には満足は無いぞといふ。それを確かり説くのが苦諦である。世間の人はなにか求むる所があるけれども、その求むる結果満足でありはしない。例へば吾々は金があつたらと思ふ。所が金が出来て満足かといふとさうではない。金が出来れば金が出来たてやはり苦勞がある。決して満足はしない、自分の低い者は出世したら満足だと言ふ。けれども一番出世しても満足はありはしな

い。總理大臣ナンといふものは一番上の出世だけれども、總理大臣になつてもやはり満足はありはしない。ウツカリするとピストルで撃たれる、あまり面白いものでない。小さい家に住んで居ると、大きい家に住んだら宜いだらうと思ふ。けれども大きい家に住んで居る者を見ると、何處でも満足して居る者はありません。だから人間は餘所から満足が與へられるものでない。餘所を見ると大層羨しく思ふけれども、その境界に居て見ると「本當に俺は満足だ」といふ人はありはしない。世間の人は皆さうではないかといふことを徹底的に有りの儘に説かれま

す、それを苦諦と言ふ。實際世の中を見るときさうでせう。昔の人の歌に斯ういふ歌があります。

いづれかは思ひの家にあらざらむ

よその樂しき世こそありけれ

實際その通りで、皆それ／＼文句がある、餘所から見ると、あの人は羨しいと言ふけれども、その當

人は皆文句がある。どこの家だつて文句の無い家はありはしないぢやないか。餘所から見ると楽しさうに見えるけれども、當人は少しも楽しくないぢやないか。どこでも皆「思ひの家」だ、どこの家でも文句があるのだ、斯ういふ歌がありますが、如何にもその通りでありまして、普通の世の中はそれです。金の無い人は無いで羨むけれども、有る人は有るで相當文句がある。子供の時には大人になつたら宜いだらうと思ふ。吾々も子供の時は、親父といふものはよいものだと思つた。親父は食ひたいものを食つて、勝手に寝たい時は寝られる、親父といふものはよいものだと思つた。けれども大人になつて見れば子供の方が餘程暢氣で宜いと思ふ。お互ひツこであります。今の歌にある通り、餘所から見ただけ楽しいけれども、當人はなんでもありはしない。斯ういふのが世間の常の有様であります。教とか道といふものを學ばない人は皆それであります。それを本

當に徹底的に説かれるのが苦諦と言ふ、人生は満足は無いぞといふことを本當に教へられるのであります。そこを出發點としなければいかぬ。多くの人はその所を深く考へないで、なんだか氣持が悪いけれどもこんなものだらうと思つて、いゝ加減に通つて居る。別に満足は無いけれども、人生こんなものだらうといふので、譯がわからなくて通つてしまふ。それではいかぬので、先以て人生は不満足だ、思ふ通りに行くものでないといふことを徹底的に説く、それが苦諦です。その次に「集諦」集といふのは煩惱を集めたものがお前達の心だといふことを説く、集といふのは惑の集まりで、吾々の心は煩惱の集まりである。何故世の中は苦しいか、だん／＼調べて見れば苦しい譯ぢやないが、お前達の心の中にいろ／＼な迷ひがたまつて居る。それだからお互に迷ひと迷ひの人間が

ぶつかり合つて居るから苦しい筈だ。斯ういふので前の苦諦は世の中の様子に就いて言ひ、次の集諦は銘々の心の中に就いて教へる。お前の心を振返つて見る、お前の心にいろ／＼な心持がゴタ／＼あるぢやないか。そのゴタ／＼ある心持といふものは皆迷ひだ。迷ひといふものは何だといふと、小さき自己に執はれる心持だ。人間といふものは本來一緒に生きる筈のものだ、人間は保ち合つて、助け合つて、教へ合つて行くべきものだ。それを忘れてしまつて小さい自分に執はれて、自分の都合の好い事ばかり考へて居る。お互が都合の好い事を考へて居るから衝突する。矛盾する。和合一致が出来ない。愈々世の中は苦しくなる。斯ういふ事を徹底的に教へるのが集諦であります。迷ひを集めた心であるといふことを徹底的に教へる。

して居る。毎日々々我ながら凡夫だナといふやうな目に出會ふのであります。昨日私は晝頃から出掛けまして、雷の鳴る雨の中を東京中歩き廻つた。さうして夜も餘所へ出掛けて行きました。暮れ方新聞を見ると、雷が上野に落ちたとか、淺草の方へ落ちたといふことが書いてある。「ア、さうか、自分は正午頃淺草へ行つたんだが、俺の行つた時に落ちると大變だつたけれども、俺が歸つてから後に落ちたのでよい鹽梅だつた」斯う言つて私は喜んだ。併し考へて見るとこれは淺ましい心です。俺が居る時に落ちなかつたから宜かつたといつて喜んで居るがそこに居た人は随分迷惑な話でありませう。さういふ風に慈悲だなど、口では言つて見るけれども、鬼もすれば「俺が居なくなつた後で宜かつたナ」といふやうな氣分になる。洵に我儘な話です。今日も此處へ来る前に會がありました、その會へ行つた所が「今日は好い天氣で結構です。昨日だつたらさぞ困

つたでせう」と皆が言つて居る。昨日會をやつた人はどうせ降るなら明日降つて呉れ」と言つて居つたらう。雨の方ではいつ降つて宜いかわからない。皆そんな我儘を言つて居る。天気までも自分の自由にしようと思つて居る。雷までもどうかして自分の居ない時に落ちて呉れと頼んで居る。随分これは我儘な話ですが、人間はどうも小さい自己に執はれましてさういふ氣分になつて行く。これが所謂集議です。皆迷ひを集めた心持を有つて居るから自分の思ふ通りに行く筈がない。

誰でも自分を特別に考へるといふ癖がある。だから友達同士でも秘密の話をされると快い氣持になる。「これは内々だ、他の者に言つて呉れるな、君にだけ話すのだ」と言はれると「大層俺を信じて呉れたナ」といふので、つい快い氣持になる。その事柄はどつちでも宜いことナンだけれども、特別だと言はれると快い氣持になる。その人は又折角聽いたの

を黙つて居つては心持が悪いから、又他の人に向つて「これは君だけ特別だ」と言つて話す。聽いた人が又「君だけ特別だ」と言つて話す。結局は皆に續がつて行く。それでもなんだか君だけだと言はれると快い氣持だといふやうなことは、實を言へば淺薄な話です。併しさういふやうな氣分がある。私は新宿の方を能く通りますが、あの路傍で活動寫眞の廣告のピラなどを呉れて居る。あれを貰つても役に立ちはない。武藏野館に何かがある、何とか館に何かあるといふ廣告です。貰つても役に立たないけれども、前の人にやつて自分に呉れないと、少し馬鹿にされたやうな氣がして、態々手を出して貰つて見る貰つても何にもなりはしない。直ぐ捨てしまふ。人間といふものは淺薄なものです。廣告一つでも人にやつて自分に呉れないと、なんだか侮辱されたやうな氣持がする。貰つて役に立てば宜いけれども、役に立ちはないのだから貰はない方が宜い。けれ

どもその所が凡夫です。さういふやうなことで何でも小さい自己に執はれて居る。皆がその心持を有つて居る者が集まるから、世の中は面倒になる筈ぢやないか。これを能く徹底的に教へるのが集議であります。

それから「滅諦」滅といふのはその迷ひを無くした人間が居るぞといふことを教へる。それは佛様のやうなものです。お前達は迷ひに執はれて洵につまらない生活をして居るが、それが人生の全體ではない。その迷ひを無くして、小さい自己などを捨て、しまつた人が随分居るぞといふことを教へられるのです。この人生の淺薄な状態を教へて置いて、それからその迷ひを離れた境界の事を説いて呉れるからそんなものかナ」と思つてそこで眼が覺める。ですからこの滅諦といふのが一番大事なことです。覺つた人の境界を説いて聽かせる。お前達は人が讀めると圖に乗る、人が悪く言ふと泣き出すけれども、讀

められても驚かない、譏られても慥でない人間が居るのだ。お前達は儲かると有頂天になり、損が行くと腰を抜かすけれども、儲かつても損が行つても何ともない人間が居るのだ。斯ういふやうに迷ひや苦しみや惱みを離れた人の境界を説きまして、全く普通の凡夫の生活とは別の天地が有るといふことを能く教へる。それが滅諦であります。

それから最後にさういふ境界に入るのにはどうしたら宜いかといふ覺りに入る方法手段、そのやり方を教へる。これが「道諦」であります。そこで四つになる。世の中は不満足だ(苦諦)、お前達の心は迷ひに満ちて居る(集諦)、所がその苦しみや惱みの無い人間が居るのだ(滅諦)、そこに行くのには普通ではいかぬから、その方法を以て修行をしなければいかぬ、その修行を教へてやらう(道諦)、斯ういふことになつてそれで一通り済むのであります。佛敎の入口はそれナンです。併し佛敎の出口も

それです。それが本當に徹底すれば宜いのであります。

先づこれが「四諦」といふことの一通りの説であります。一番初め佛の教を學んで、世間に執はれないやうな氣分を作りたいたいふ要求のある人には、この四諦の法を説いてやる。

さうして「生老病死を度す」生老病死といふのは人生の一通りです。生れて、年取つて、病をして、死ぬ、これが人生の普通です。その普通の人生に執はれないやうな心持を作らせる、それが度するといふことです。「度」はわたらせること、わたらせるといふのは執はれないやうにしてやる。人間だからどうせ一度は死ぬのだけれども、生きても死んでも驚かないやうな氣分が出来ればそれで宜い。死なないといふ譯には行かない。普通の人は死ぬといふことを知つて居つてもまさかと思つて居る。これはどうも淺ましい事ですが仕方がない。さう言つては失

禮ですが、あなた方でもさうでせう、人間はいつ死

ぬかわからぬといふことは御承知でせうけれども、まさか今夜死にはしなれないと思つて居る。誰も諸合うて呉れはしなないけれども、皆さうきめて居る。私などもそんな事はモウ十年も喋つて居るけれども、やはりまさか今夜死にはしなれないと思つて居る。私は今日或る人から、二三日中に晩食を御馳走するからといふ手紙を貰つたから、私は行くといふ返事を出した。二三日は生きる積りでチャント返事を出して居る。どうも人間といふものはその所が未練なものであります。いつ死ぬかわからぬが、まさかと思ふ吾々のやうに白髪が生えて來ると、友達の中で死ぬ者が出来る。皆で集まつた時に話をして、誰も死んだ、彼も死んだ、「この次は誰だらうか」などと、言ふこれは冗談です。「この次は俺だ」などは思ひはしない。「まさか俺ではないだらう、誰か他の者だ」と思つて居る。洵に淺ましいものですが人間といふ

ものはそれはナンです。それだから又慌てる。いつでも覺悟さへして居れば今死んだつて慌てはしない。日蓮聖人がよくいろいろの迫害に出會はれる時に「豫て存知の旨なり」と言はれた。人が石をぶつける。「豫て存知の旨なり」石ぐらゐぶつけられることは知つて居る。人は知つて居る。人が棒で殿つて來る、「豫て存知の旨なり」棒で殿られるぐらゐのことは知つて居る。驚きはしない。だから今死ぬといつても豫て存知の旨なら驚かない。まさかと思つて居る時に急に病氣が來たりするから驚いてしまふ。大正十二年の地震でも、地震が明日の午頃來るとわかつて居ればあんなに驚きはしなかつたのだけれども、不意にグラグラツと來たから皆驚いてしまつた譯です。

そこで吾々は如何なる境界に在つても、生きても死んでもどうなつても驚かないだけの覺悟を平生に附けて置かなければならぬ。それは平生に在る。併しなかくそれが出來にくいものです。北條時宗が

先生と仰いだ祖元といふ坊さんがあります。これは支那の坊さんで、日本へやつて來て、北條時宗が先生と仰いだ偉い坊さんです。その人が支那に居つた頃に、或るお寺に居つて弟子を集めていろいろ教へて居つた。人間の命といふものは假のものだ、例へば海の水が寄せて返るけれども、水は減りもしなければ増えもしない、同じ水なんだ。それと同じ事で吾々はこの世の命は無くなつたつて、永久の命といふものは變りはしないのだから、人間の生死は水の寄せて返るやうなものだと思へといふことをよく教へて居つた。それから一週間ばかり經つて、又多勢を集めて「どうだお前達わかつたか」「わかつた」「言つて見ろ、人生は何だ」「それはモウ人生は寄せて返る水のやうなものです、寄せて返つたつて水に増減は無い、人間の身は一時無くなつても永遠の命は……」と言ひ掛けて居る所に、外の方からツツといふ關の聲が響つて兵隊が押寄せて來た。さ

うしたら「人生は……」ナンと言つて居つた弟子達が皆逃げてしまつた。何にもならない。寄せて返る水も何もありません。兵隊の聲で慌て、皆逃げてしまつた。それから祖元は笑つて「奴等は駄目だ、口先だけはごうやら口真似が出来たけれども、兵隊の聲だけ聽いて逃げてしまつた。まだ「駄目だ」と言つて、自分は少しも驚かないからその部屋の中にごつしりと坐つて居つた。さうした所がこれは蒙古の兵隊でありましたが、その大將が一人ツカツカと中へ入つて見ると、大きな堂の中は空つぽで誰も居ない。見ると部屋の中に一人の坊主が坐つて居る。それから後ろへ寄つて「オイ坊主」と言つた所が、黙つて坐つて居る。こいつ耳が聽えないのかといふので、刀を抜いてバツと眼の前に突附けた所がやはり黙つて居る。それからモウ一度大きな聲を出して「オイ坊主」と言つた「何だ」「貴様は貴様の首の上に劔が閃いて居つて、この劔がウツカ

リすればお前の命を断つといふことを知らないか」と言つた。さうすると祖元は靜かに振向いて、「オイ侍」「なんだ」「貴様は貴様の眼の前に少しも驚かない人間が坐つて居ることを知らないか」と言つた。これには蒙古の大將も驚いて度肝を抜かれて刀を鞘に納めて手を突いて挨拶をして「私はあなたに危害を加へる積りではない。兵隊を暫く此處に休ませて貰ひたいと思つて来た、どうぞ休ませて貰ひたい」と懇ろに挨拶をして、暫く休んで行つてしまつたといふ話があります。これは何でもない事やうだけれども、いざといふ時になると實はなか／＼出来な、お互でも斯うやつて居る時には、人間の命は寄せて返る波の如しとやつて居るけれども、今技に地震でもガラム／＼と来たたら、なか／＼寄せて返る波どころの騒ぎではない。壁に捉まつたり、梯子段にとつ附いたりやるでせう。なか／＼それは難かしい。どうしてもさういふ迷ひとか苦しみを離れ

る爲には、道といつて離れる爲の修行の仕方を知らなければいけない。たゞ出鱈目ではいかぬ。いろいろ修行をして、いろいろ工夫して、いろいろやつて居る間にだん／＼心が作り上げられて来るのであります。一足飛びに出来るものではない。それを一通り教へる。さうして「生老病死を度し」世の中にある／＼の變化がありますけれども、その變化の中を渡つて驚かないやうな心持を作らせる。

さうして「涅槃を究竟せしめ」涅槃といふのは、「滅」といふ字です。滅といふのはスツカリ無くすことです。極く深く言ふと死ぬことを涅槃とも言ひます。お釋迦様の涅槃と言へばお釋迦様が死ぬことです。これは極く深い意味でありまして、深く言へば滅といふことは生死を離れる意味です。生死といふのは人生の變化です。その變化に執はれないやうな心持になることが涅槃です。だから覺るといふ

意味は「どうでも宜しい。勝つても負けても驚かない、儲かつて損をしても驚かない。」斯ういふやうに所謂生死といふ人生の變化に支配されない心持になることです。その涅槃を究竟せしむるといふつて、さういふ心持を徹底的に有たせるやうにするこれが佛様の教をお説きになる一つの方法であります。

辟支佛を求むる者の爲には、應ぜる十二因縁の法を説き

(爲す求む辟支佛者應十二因縁法)

辟支佛といふのは印度の言葉であつて、譯すると「縁覺」と申します。縁によつて覺る階級の者であります。今申した聲聞のやうに、佛の教を耳に聞くだけでなく、自分が日常出會ふ事柄と思ひあはせて成る程世の中は變化の多いものだ、だから此の變化に執はれないやうな氣分をつくりたいナといふ覺悟を定める者、それが縁覺であります。さういふやう

な修行をしたといふ希望を有つて居る者に對しては、それに相當する十二因縁の法を説かれるといふ十二因縁といふことは、これから後の方にもありますけれども、こゝで一通り申して置きます。

- 一、無明
- 二、行
- 三、識
- 四、名色
- 五、六處
- 六、觸
- 七、受
- 八、愛
- 九、取
- 十、有
- 十一、生
- 十二、老死

吾々凡夫の、教をまだ十分に心得ない者の、一生涯

に自ら具へて居る性質と解釋すれば宜しい。生れてからだん／＼年を経るに従ひまして、そこに『名色』といふものが分別されて來る、『名』といふのは心のこと、『色』は身のこと、生れて幾日か経つ間にだん／＼心も發達して來る。身も發達して來る。心身兩方の働きがだん／＼發達して參ります。それからその心と身の働きが更に細かに分れて發達して參ります。それからその心と身の働きが更に細かに分れて發達して來ると『六處』といつて六つになります。

眼 耳 鼻 舌 身 意
眼で物を見、耳で音を聴き、鼻で香を嗅ぎ、舌で物

の心の働きと身の働きを調べて見ると、斯う道を通つて居るといふ、凡夫の生涯の縮圖のやうなものです。これを十二因縁と言ふ。初めの一と二は前生で、三から以下が今生になる。吾々の心はこの世の中で初めて出來たのではないといふことを佛敎は認める。前世がある。その前世に於て『無明』といつて、心に迷ひがあつて、迷つた心持を有つて居つた。だからその無明に依つて『行』といふ不完全な行ひをして居つた。斯う考へるのであります。心に迷ひがあつて、その迷ひが行ひに現はれて、あまり感心しない不完全な行ひをして居つた。さうしてその不完全な心持と不完全な状態を以て、今生に生れて來る。前の生で迷ひを以て不完全な行ひをして居たその命が今生に生れて來る。

『識』といふのは、これは吾々の生れた時に持つて來た性質を言ふ。生れた時に決して人間は完全無缺なものではない。だから『識』といふのは生れた時

を味はひ、身で觸れて硬いとか軟いとか、冷たいとか熱いとかわかる。それから意でそれを思つて、ア、此處に机があるナ、此處に電氣燈があるナ、此處に人が居るナといふやうに知り分ける。心身といふ二つだけけれども、その二つがだん／＼澤山の經驗を積むに従つて六つの働きが皆發達して來る。これを六處といつて六つの働きのあります。斯ういふものがだん／＼發達して參ります。生れたばかりではなか／＼發達しないけれども、世の中で經驗を積む間にさういふ六つの働きがだん／＼と發達して來る。さうすると今度は『觸』といつて外界の感覺であります。今の心理學の言葉で言ふと感覺です、外からいろ／＼な刺戟が與へられて、その刺戟に依つて感覺が起ります。例へばこの色は赤いとか青いとかこの音は大きい聲だとか小さい聲だとか、鼻でもいろ／＼香を嗅いで、これは牛肉の香だとか麝香の匂ひだとか、舌では甘いとか辛いとか、いろ／＼感覺

が出来て来る。これが觸でありませう。

それから今度は感覚が起りますと、その感覚に就て感情が起ります。「愛」といふのは感情です。眼で色を見て、耳で聲を聞いてそこに感情が起る。あつた良い色だ、悪い色だ。氣持が快い、氣持が悪い。雷の聲を聴くのと琴やピアノの音を聴くのとは、同じ聲を聴いても受といふ受ける感じが違ふ。或る時は快い氣持になり、或る時は悪い氣持になる、或る時はいら／＼した氣分になり或る時は緩く／＼した氣分になる。即ち感情といふものが起つて来る。

そこでその感覚と感情があるから、今度は「愛」といつて好き嫌ひといふものが起る。いろ／＼な感情が起るから、その快い感情を起したものは好き、悪い感情を起したものは嫌ふ。好き嫌ひといふものが起る。その好きなものは成べく永く續くやうに、嫌ひなものは成べく避けたい、斯うなつて參ります。好き嫌ひが起るから、そこで今度は「取」といつ

て選擇作用、選ぶ作用が起ります。好きなものは成べく永く置きたい、嫌ひなものは止めたいといふやうに、選ぶといふ働きが起る。斯ういふ風になか／＼細かく分けてある。今私は學校で心理学を教へて居りますけれども、今の心理学と少しも變らな。三千年の昔から、さういふことをチャント人間の心持に就いてよく分けて居る。外界から刺激がある時、その感覚に依つていろ／＼な感情が起つて好き嫌ひが起る。その好き嫌ひに就いて愛憎が出来てそれを選ぶ、さうして成べく善いものを自分の側に置きたい、成べく悪いものは皆離れてしまひたい。斯ういふ選擇作用が起る。

それからそれに依つて「有」といふものが起る。有は差別です。選擇作用から差別が起る。選ぶから善いものは俺のものだ、悪いものは貴様持つて行けといふやうに差別してしまふ。それが人生であつてだん／＼さうなつて行く。人間は淺ましいことに、

自分の好きなものだと成べく自分の周圍に寄せて置きたい。「これは俺のものだ」といふ。嫌ひなものは成べく遠ざけたい。「貴様の方へやつてしまはう」となるから差別が起る。都合の悪い事は考へて都合の悪いものは皆外へ押付けてしまはうとなつて来る。だから俺のものだ、お前のものだ、敵だ、味方だ、警だ、友達だ……いろ／＼差別が起つて来る

これは皆好き嫌ひから起る。好き嫌ひの中にいろ／＼又並び立をするからそこで差別が起つて来る。それで人生が面倒臭くなる。

その差別の結果「生」といつて人生、この世の中といふものが出来て来る。今お互ひの生きて居る世の中は、差別から出来て来る。「親父が……」「息子が……」「敵が……」「味方が……」「彼奴が上だ……」「此奴が下だ……」「彼奴が俺の上に坐つて怪しからん……」といふやうなことを言つて、人生といふものはまことに面倒臭い、始終煩い事だらけであり

ます。その人生といふものが全くこの差別の中から生れて參ります。

さうして其の人生がいつまでも續いて、その内に年を老つて死んでしまふといふ、これで一生涯になる。好きだ嫌ひだと言つて居る内に年を老つて死んでしまふ、これが普通だといふ。大概の人がさうでせう、善い悪いのと言つて居る内に、年を老つて死んでしまふ。だん／＼年老つて氣力が無くなる。「あゝ人生は思ふに委せず、俺も此の頃は悟つたぞ」ナンと言ふけれども、それは悟つたのでも何でも無い、疲れたのです。大抵疲れて死んでしまふ。

斯ういふ十二の階段をいくらでも繰返して居るから、又こんど生れるその時に、やはり初めから不完全な心持をもつて生れて、それがだん／＼發達して好きだの、嫌ひだの、俺だの、お前だのと言つて暮して、年を老つて「ア、思ふに委せない」と言つて死んでしまふ。こんど生れかかはつても又それをやつ

て居る、それが普通の凡夫の一生涯ではないか。それを何遍も繰返して居る、幾度生れかはつても同じぢやないか。斯ういふことを本當に徹底的に教へられるのが所謂十二因縁の説であります。十二段のことが原因となり結果となつて、いろ／＼變つて行くといふのであります。

言はれて見ると成る程そんなものです。だから若し吾々が覺らないで、教も道もわからないで、たゞ其の日／＼を送るならば、一生涯これで通つてしまふ。始終外界から刺戟されて、それに依つて好きだの嫌ひだの、あれだのこれだの言つて居るけれども、結局思ふに委せない、その内に年を老つて死んでしまふ。これでは仕様がなないではないか。何遍生れかはつても、いつも不足々々で、つまらない／＼で一生涯を送つたのでは、幾度繰返しても意味は無いではないか。だから其の一番初めの無明を取除かなければいかぬといふことを佛が教へられる。迷つ

諸の菩薩の爲には、應ぜる六波羅蜜を説きて

(爲諸菩薩、説六波羅蜜)

所がそれだけでは人間は満足しない。前にも申したやうに、心の迷ひを取除くといふことだけでは満足しないから、それならば生甲斐のある生き方をするにはどうしたら宜いか、境遇に執はれ、周囲の事情の爲に動かされて居つたのではつさらぬから、本當に生甲斐のある生き方をするにはどうしたら宜いかといふ疑問が起る。それは菩薩の行を積むより外ないといふことになる。その菩薩の行を教へるものが前に申した大乘の教である。それまでは小乗といつて低い方の教でありますが、菩薩の行といふのは大乘の教であります。

その菩薩の行といふのはどんな行であるかといふと「菩薩」といふのは「菩提薩埵」といふ言葉が略されて居るので、菩提薩埵といつてはあまり長過ぎるから菩薩と言ふ。今でも言葉があまり長いと皆半

た心持でいろ／＼な行ひをして居る、不完全な性質が生れた初めから附纏つて居るから、いつまで経つても仕様がなない。それ故に、吾々は現世に於いて幸に佛の教に遇つたのだから、この佛の教を學んで、その心の無明を根本から除くことに努めなければならぬ。さうすると十二因縁の埒の外に出ることが出来る。斯ういふ所を通らないで済む。十二因縁は凡夫の生活であるから、その凡夫の生活を離れようと思ふならば、根本に無明といつて心に迷ひがあるからその迷ひを取除く爲に佛の教を學ばなければいかぬ斯ういふことになる譯です。

それで辟支佛を求めるといつて、日々出會ふ事柄に依つて世の中を離れる心持を作りたいといふ、それだけの要求がある者には、それに相當する十二因縁の法を説いて、これが凡夫の生活だ、この凡夫の生活を離れることが必要ではないかといふことを、本當に徹底的にお教へになるのであります。

分にします。モダンボーイでは長いからモボと言ふ南滿洲鐵道といふのを滿鐵と言ふ。それと同じ事です。菩提薩埵では長過ぎるから菩薩と言ふ。その「菩提」といふのは覺るといふこと、「薩埵」といふのは人といふこと、そこで菩提薩埵といふのは覺る人といふこと、それが「菩薩」であります。覺る人で覺つてしまつた人ではない。覺つてしまへば佛様です。毎日々々少しづつ修行して、少しづつ覺つて行く覺つて行く人が所謂菩薩である。だから吾々と雖も覺らう。本當に人生の意義を知りたいと思つて修行を積んで行くならば、吾々だつて御同様に皆菩薩である。觀音様ばかりが菩薩ではない。吾々だつて皆菩薩であります。マア併し怪しい菩薩ですけれど、兎に角菩薩です。迷つた生活を送りたくない、本當に覺つて行きたい。結局は佛にもなりたいたい。斯ういふやうな望みを起すならば、吾々はお互ひに皆菩薩であります。だからお經の中に「菩薩よ」と呼

び掛けられて居るのは、吾々の事を言はれたのであると思はなければならぬ。

併ながら吾々と観音様などは少し格が違ふ。向ふは菩薩のズツと先輩の菩薩、こつちはマア菩薩の見習の方である。併し佛様はなか／＼抜目なくうまい事を言つて居られる。「お前達も菩薩だぞ」と言はれて置いて、しかし観音様や何かと同じだと言つてはちとさまりが惡からう、そこで「新發意の菩薩」と言ふ。新發意の菩薩といふのは、新しく意を發した菩薩、これから修行を始めませうと思ひ附いた菩薩、所謂見習の菩薩であります。吾々は新發意の菩薩である。「これから一つ……」と今頃思ひ出したので、まだ眞物ではない。併しマア菩薩には相違ないから、観音様でもそんなに他人ではない。親類同志と思へば宜い譯です。

菩薩といふのは今申すやうに、この世の中の無常を觀じたゞけではいけないから、本當に意義の有る

一生を送るやうにしなければいかぬ。さう思つて修行する者が菩薩であります。所が修行するといふことは理窟がわかつたゞけではいけない。これは度々申す事でありますが、一通り理窟がわかつたつてそれは何でもない事である。自分がやつて見なければ「成程だナ」といふことはわからない。だから菩薩の修行をするには六波羅蜜と申しまして、大體六つの箇條を掲げて、この六つの事を實行しろといふことを教へられるのであります。

「六波羅蜜」といふのはつまり吾々の日常の實行の標準です。例へば儒教の方で言へば仁義禮智信といふことを言ふでせう。それと同じやうに、佛教の方で菩薩の行をするならば先づ六つの點に氣を附けるさうしてこの六つの點に就いて己れを調べて見て、己れに足らない所が無いやうに努めろといふのが所謂六波羅蜜であります。

波羅蜜は六度といふことです。度は「わたる」といふ字で、普通は「渡」の字を書くのでせうけれども

お經の中では「度」の字を使つてある。わたるといふのは、河でも海でもその中を渡つて向ふの岸へ行くと。ですからこの六つを實行して行くと、迷ひの中を通り抜けて覺つた境界に行ける。だからこれを度と言ふ、迷ひの中を渡る方法です。それが「波羅蜜」です。その迷ひの中を通るのには方法が六つある。それは

- 一、布施
- 二、持戒
- 三、忍辱
- 四、精進
- 五、禪定
- 六、智慧

これが所謂六波羅蜜であります。これは少しも吾々の日常の生活と離れたことではない。今晩寝る時

考へて見る「自分の今日の一日の行ひがこの六つの條件に適つて居るか、適つて居ないか」を振り返つて見る。毎日この條件に合せて自分を調べて見るやうにするに宜いのであります。

先づ第一に「布施」をしなければいかぬ。人間といふものは、互に助け合つて、互に救ひ合つて生きて行かなければならぬものでありますから、その根本に於ては布施をしなければいかぬ。布施といふのは自分が他の人を救ふことである。これをやらなければいけない。菩薩の行はこれから始まる。「人はどうでも俺さへ……」と思つたのではナンで話になりませぬから、先以て布施を實行する。そこから修行が始まるのであります。さう言ふと、布施など出来るものか、生活の樂な人は幾らでも貧乏な人を救つたら宜からうけれども、自分達は「一パイ」だ、なか／＼人を救ふ暇は無いと言ふ人が多いのであります。決してさうではないので、布施には、

財施
法施
無畏施

の三つがありまして、如何なる人でもこの三つの中
のどれも出来ないといふ人は無い。どんな境遇の人
でもどれか出来るといふ人は無い。先づ第一に「財施」といふの
は品物を以て人に施すこと、それから「法施」とい
ふのは人に物を教へること、「無畏施」といふのは
自分が骨折つて、自分が勞力を以て人の心配を少く
してやること、畏といふのは心配のこと、人の苦
勞を省いてやることを無畏施と言ふ。さうしたらど
れか出来るでせう。どんな境遇に居つても三つとも
出来ないといふ人は無い。第一の財施といふのは人
に物を施すことだと今申しましたが、これも誰でも
出来るのです。どんな貧しい人でも出来る。何故な
らば、私が此處に居る人に自分の墓口を開けて一圓
やるといふことは、これは確に財施です。けれども

ことが極めて大事である。小僧さんは御主人に財施
をしなければならぬといふことを能く申すのであり
ますが、出来るのです。六人の子供があつて、五人
分の費用で平気で生活すれば、一人分の生活費を子
供が親に財施してやつたと同じ事である。人の無駄
を省かせることは、自分が懐ろから金を出してやつ
たと同じことであるから、これは幾らも出来る。そ
れからモット進んで言へば、自分が質素簡易な生活
をして居るといふことは、世の中に向つて財施をし
て居ることである。天地の間に出来る品物といふも
のは限りがある。穀物だつて、肉だつて、油だつて
なんでも限りがある。その限り有る物を一人が餘計
使へば他の者が困る。一人が節約して餘して置けば
誰か使ふ。だから節約をして生活することは財施
である。「誰かお使ひなさい」といつて餘して置い
てやると同じことである。それはモウ非常に善い事
である。だから私は青年の人に節約をしろなど、言

私が自分の懐ろから一圓出してやらないでも、此
處に居る人が一圓損をしないやうにしてやることは
やはり一圓やつたと同じ事です。これなら出来るで
せう、自分の懐ろから金を出してやることは、懐ろ
が一文無しならば出来ないけれども、此處に居る人
が十圓使ふ所を九圓使ふやうにしてやることならば
それは金が無くても出来る。さうすると十圓使ふ所
を九圓使つて済ませれば、これは一圓やつたと同
じになる。だから財施は出来る譯です。人の無駄を
省かせる。それが財施です。これは確に出来る。だ
から私は能く方々の商店の小僧さんに言ふ、君達は
財施をやらなければいかぬ。向ふの店では二人の小
僧さんが仕事をする所を、君が一人で仕事をすれば
御主人に一人分の給料を省かせてやるのだから、御
主人に對して財施をして居る譯である。これは出来
るぢやないか。人に無駄をさせないといふことは人
に金をやつたと同じだから、人の無駄を省いてやる

はない。節約といふと吝たれて嫌やです。「日本は
貧乏だ、節約しろ」ナンと言ふと、いやに吝たれに
なるから、節約をしろとは言はない。財施をしろと
言ふ。お前が餘分なものは使はないで餘して置け、
お前が餘して置けば誰か使ふ。だから財施をしろと
言ふ。飯を三杯食ふ所を二杯食つて一杯財施したら
どうだ。斯ういふやうにやれば氣持が快い、節約な
ごいふ吝な言葉を使はないで、財施をすると思へ
ば快い氣持です。だから何でも無駄を省くといふこ
とは財施です。省いて置けば誰か他の人が使ふこと
が出来るのでありますから、立派な財施である。斯う言へ
るのであります。
それから「法施」は人に教を與へることでありま
すが、この教を與へるといふのも、何も口で言ふば
かりが教ではない。吾々の顔つき、手つき、足つき
皆教である。一人の人が緊張した顔つきで仕事をし
て居れば、側の者が懶けて居られなくなる。それは

「お前も働け」と教へてやると同じ事である。口で言はなくても宜しい。一人でニコニコ笑つて居ると、相手の人が嫌やな顔をして居つてもやがて笑つて来る。それは「お笑ひなさい」と教へてやると同じ事である。だから吾々の一舉一動が皆法施である。人に教を與へられるのである。自分が努力して居れば、働けと言つて教へて居る。自分がにこやかにして居れば、笑へど教へて居る。斯ういふやうに思ふと法施は確に出来るのであります。

それから「無畏施」といふのは人の苦勞心配を省いてやること、これも出来る。吾々は始終それが出来る。暗闇で石に躓いた時に、後の人が又頭ぐといけないからといふので、その石を泥溝の中に放り込んでやるのも無畏施である。後から来る人の苦勞を省いてやることであるから之は無畏施であります。

餘程前の話であります、東京の巢鴨の片隅に、或る工場に勤める職工さんが居つた。極く貧乏な職

一年半毎日々々やつて居つたから、いつの間にかあの石炭殻で彼處の泥濘がスツカリ硬くなつてしまつた。感心だナ」と言つて近邊の人が噂をして居る。

それを地主が聞いた「さうか、俺は地主でありながら彼處の路を手入をしてやらなかつたが、あの貧しい職工が到頭路を良くして呉れたか、感心だ。俺はどうも職工に及ばなかつた」と言つて、地主が初めて心を改めて、自發的に其處の路をスツカリ良くしてやつた。斯ういふ事があります。この職工は自ら布施の三つを皆行つた人である。自分が石炭殻を持つて来て敷いて近邊の人の苦勞を除いたから、これは無畏施です。その無畏施に依つて地主に教を與へたからそれは法施である。さうして地主に金を出して路を繕させたことは財施に當る。自分が毎日風呂敷に石炭殻を包んで歸るといふことだけで、この三つの布施を皆實行した。これは本當に模範の人である。世間中の人が皆さういふ心持になつたら、こ

工さんで小さい長屋に住んで居つた。勿論家賃は奮發しないから、水溜りの路のジクムとするやうな所に住んで居つた。家主さんも路を修繕して呉れない、そこでその職工さんがこの路を良くしてやらうと考へた。それから朝出掛けに風呂敷を一つ持つて行くさうしてその工場では始終石炭を焚くから、歸り掛けにその風呂敷に一パイ石炭殻を貰つて来て自分の家の前へ撒いた。近邊の人は嗤つて居つた。「あの路の悪い所に風呂敷一杯ぐらゐの石炭殻を敷いたつて何にもなりはしない。馬鹿な事をするナ」と言つて嗤つて居つた。所がその人は毎日々々風呂敷を一つ持つて出て、その風呂敷に一パイ石炭殻を持つて来て撒く、これが一年中一日も休みがない。さうして一年経ち、一年半経つ間に、風呂敷一杯でも三百、四百と溜るから、その路がスツカリ良くなつた。そこで近邊の人が驚いた。「成程馬鹿にならない。初めはナニ風呂敷一杯と思つたけれども、一年か

の世の中といふものは餘程渡り易い世の中になつて行くに相違ない。だから布施といふことを億劫な事に思はないで、皆がそれをやつたら宜い譯であります。

その次に「持戒」といつて戒を持つ戒の事は後に又詳しく申しますが、佛様は、お前達は間違ひが多いから、斯ういふ所々氣を附けると戒められた事があります。その戒を持つて行くといふことが大事である。それは何持大事かといふと、吾々が世の中の爲に力を盡さうと思つても、自分が考へが足らないと、人の爲にしようと思つた事が人の爲にならない場合が随分ある。それだから吾々は本當に人の爲にしようと思ふならば、佛の戒を持つて自分を完全なものに仕上げるといふ必要がある。これは世の中の爲と思ひながら、世の中の爲にならないことが随分あるものです。煩惱に満ちた心持を有つて居りますと、世の中の爲にならぬ事があります。

私が英吉利に居りました頃に斯ういふ話を聞いた。英吉利の家庭ではよく犬を飼つて居る家があります。殊にこれはスコットランド邊りでよく飼ふので、家の中へ入つて赤ん坊など、一緒に遊んで居る犬が、あります。或る一軒の家で赤ん坊が生まれた。それからその赤ん坊を部屋に寝かして置いて、英吉利ではあまり蠅は居ないけれども、チョット倫敦の田舎の方のことで蠅が居る、だから母親が始終扇みたいなもので蠅を追つてやつて居つた。それを犬が側で見つて居た。或る日の事赤ん坊を其處へ寝かせて母親が部屋を出て行つてしまつて犬と赤ん坊だけ居つた。すると蠅がやつて来て赤ん坊の顔に止まつた。そこでその犬が始終見て居るものだから、蠅を追つてやらうと思つたのでせう。赤ん坊にたかつて居る蠅を力一パイにビシヤツと殴つた。その爲に生れたばかりの赤ん坊が窒息して死んでしまつた。斯ういふ話を聞いた事があります。私はそれを聞いて熟々思

つたこれなんだ。犬は親切の心持で赤ん坊の蠅を追つてやらうと思つたのだけれども、彼は智慧が足りないから、蠅を追はうと思つて赤ん坊を殺してしまつた人間にも斯ういふ事が多い。世の中の爲と思つてやつた事が世の中の害になる。人の爲と思つてやつた事が人の心を煩すといふことは屢々ある。自分分は力が足らないと、自分の分別が足らないと、世の中の爲と思つた事が世の中を害する。人の爲と思つた事が人の心を煩すことが屢々ある。それだから何でも人の爲とたゞ思つてはいけない。自分の頭腦を拵へなければいけない。自分を良くしないと、世の爲と思つた事が世の爲にならない。

そこで戒を持つといつて、佛様が吾々に戒を與へて、お前の心には斯ういふ迷ひがある。斯ういふ間違ひがあるといふことを指摘して教へて下さるから、その佛の教を持つて吾々の心の迷ひを除くことに努めなければならぬといふのが、第二の持戒であ

ります。これは自分の爲だと思ふが自分の爲ではない。結局人の爲である。吾々は自分を完成して行かなければ世の中を救ふことは出来ない、世の中を救ふ積りでも救ふことは出来ない、私は三歳や四歳の子供なら、轉んで泣いて居るのを負つて家まで届けてやるけれども、四十二貫の大男が倒れて居るのを背負つてやる譯には行かない、こつちが潰れてしまふ、大男を背負ふ爲には自分が大男にならなければ背負へない、世の中を本當に救はうと思ふなら自分自身を完全にしなければならぬ、自分がつまらない人間で居つては、世の中を救はうとしてもそれは出来ない事である、そこで戒を持つ、その戒の事は後に又申しますが、いろ／＼佛が戒めて居ります、お前の心には瞋恚があるからいけない、貪慾の心があるからいけない、愚痴の心があるからいけない、嫉む心があるからいけないといふやうに、吾々の平常持つて居る心の迷ひを指摘して戒められて居ります。

その戒を持つといふことが非常に大事である、これが出来ませぬと、折角布施をしようといつても布施が出来なくなつてしまふ。

第三の「忍辱」これは瞋恚を起さないといふこと

でありますが、持戒をしようと、うつかりすると人間が偏狹になる、世の中でもさうです、堅い人といふのは大概難しい人でせう、人に金を貸して、十銭貸したのをいつまでも返さないと言つて氣にする人がある、「この間十銭貸したがまだ返さない、どうしたらう、忘れたんだらうか」と言つて氣にする人がある、さういふ人は自分も借りたら直ぐ返す人です、自分が堅く返す人は、人が返さないと怒る。それから人が返さない時に「マアどつちでもいゝや」と言ふ人は、自分も「どつちでもいゝ」と思つてなかなか返しはしない、どうも人間といふものはそのどつちかに偏るものです、だから氣の廣い人といふものは、氣の廣いのは結構ですが、どうも狡くていけな

い、堅いのは結構だけれどもいやに偏窩でいけない
どつちかに偏る。それではいかぬ、人生は本當を言
へば自分はキチンとやつて置いて、人の足らない所
は宥す、斯う行かなければ本當ぢやない、佐藤一齊
(徳川の末頃の儒者であります)が大變善い事を言
つて居る。

「春風以て人に接し、秋霜以て自ら肅む」

(春風以て人秋霜以て自ら)

人に向ふ時には春風のソヨ／＼吹くやうな緩くりし
た軟い氣分に向ひ、自分に對する時には秋の霜のや
うな凛とした心持で自分を戒めて行くといふ、これ
なら申分がない。これが本當の所謂君子の態度でせ
う。世の中に立つにはさうあるべきです。所が吾々
はその逆で、春風以て自ら宥し、秋霜以て人を責め
るといつたやうな、自分の事はいゝ加減にして置い
て、人の事ばかり言ふ。それでは逆も世の中はうま
く行かぬ。それでどうしても自分自身はキチンとや

紗か何かを赤帽に持たせて、貴婦人がしやなり／＼
と歩いて居る。「俺はこんな重い荷物を持つて居る
のに、あんな小さい荷物を持たせるのは怪しからぬ」
といつて腹を立てる。けれども「ああ可哀さうに、
あんな荷物も持てないのだ、彼女は手がどうかして
居るのだナ」と思へば少しも腹は立たない。私の家
の子供が小学校へ通つて居りますが、隣りに大變金
持の坊ちゃんを列べて居る。辨當に鰻だの、牛
肉だの、卵だのをに入れて持つて来る。宅の子供は時
々秋刀魚の干物だの、鮭の鹽引だの、油揚げだの、そ
んなものを持たしてやる。宅の子供は不平を言ふ、
隣りの坊ちゃん毎日美味い物ばかり持つて来ると
言ふ。それから私は言つてやる。「その隣りの坊ち
やんはよく出来るか」「よく出来ない」「それ見ろ
だから隣んでやれ、その坊ちゃん馬鹿だから美味
い物でも食はなければ逆も學問は出来ないのだ、可
哀さうだと思つてやれ、さうすれば何ともないぞ」

らなければいかぬが、世の中には間違つた人間が多
いから、その間違つた人間を無暗に咎めないで許し
てやらうといふ氣分、それが忍辱です。

瞋恚を發しない、人を容れること、これは非常に
必要であります。だん／＼世の中が難しくなつて來
ますと、どうしても人を宥すといふ心持がなくては
いけない。人を宥すといふのはどういふのかといふ
と、怒らない、どうして怒らないことが出来るかと
言へば、哀愍の心を起せば宜い、可哀さうだといふ
心持を起したら腹が立ちはしない。往來で人にぶつ
かる「馬鹿野郎氣を附けろ」と言つて怒る。けれど
も「ア、可哀さうに、この人は眼が見えないのだ
ナ」と思つたら、少しも怒れない。可哀さうな人だ
と思つたら怒れるものではない。向ふが間違つて居
るのは、正しい事を知らないのだから可哀さうなも
のだ、さう思へば怒れない。停車場へ行つて見ると
自分は重い荷物を提げて居るのに、小さな縮緬の袂

と言つて教へてやるのであります、人に對して憐
めば何でもない。三町か五町の所を自動車に乗つて
行く、怪からんと言つて怒るよりも、「彼奴はあの
位の所が歩けない、足がどうかして居るのだ」と思
へばなんでもない。怒むといふ心持が一度起きたら
怒るといふことは決してありはしない。だからすべ
て世の中の足らないものを怒めば宜い。さうすると
瞋恚といふものが出て來ない。瞋恚といふものは要
するに恐む心持が足らないから出て來る。赤ん坊に
頭を打たれて怒る者はありはしない。だから頭を打
つ奴は大概赤ん坊だと思へば宜い。尤も六尺五寸の
赤ん坊ナンといふものはありはしないが、そこは考
へ様です。さういふやうに考へて行きますと忍辱と
いふことは確に出来る。

そこで怒らないといふ心持が起れば、今度は驕ら
ないといふ心持がそれから起る、瞋恚と驕慢といふ
ことは必ず伴ふ。人に「馬鹿」と言はれて腹の立つ

人は、人に讃められて自惚れる人でありませう。「旦那」と言はれてお辭儀されて快い氣持になる人は、「オイ、退いて呉れ」と言はれると直き腹を立てる怒ること、驕るといふことはキツと伴ふ。逆境に居て怒る人は、順境に居て心が驕る人である。だから驕志を除けば驕る心持が除かれる。それが大事ナシであります。たゞ腹を立てるのが悪いといふ譯ではない、腹の立つやうな人は直き圖に乗る人です。そこがいかない、これは兩方一緒に行くので、驕らないといふ心持が出来る、煽てられても自惚れない心持がキツと出来て来る。そこが非常に尊いことです。忍辱といふことは、その兩方の利益がありませう。怒らない、怒らない人なら驕らない、自惚れない。それが順境に居つても逆境に居つても堪へられる人がある。それが本當の佛道修行の出来る人です。さうなつて行つて初めて戒を持つた効がある。さうでなくて、自分は正直にして居る、人が不正直

だから腹を立てるといふことでは、なか／＼世の中を感化して行く譯には参りませぬから、そこで忍辱をして裕かな氣分を作るのであります。所がモウ一つ茲に考へなければならぬのは、吾は人間に對して腹を立てればかりでなく、人間以外のものに對しても腹を立てることがあるから、そこまですばなければいけない。即ち人に對して忍ぶことを生忍と言ひ、物に對して忍ぶことを法忍と言ふ。「法」は茲では物のことです。物に對して忍ぶといふのはどういふ事かといふと、雨とか風とか、暑さとか寒さとか、災難といふものがある。これに對して忍ばなければいかぬ。多くの人は人に對して腹を立てるばかりでなく、雨にも、風にも、雷にも腹を立てる、「眞暗闇で泥濘へ入り込んで、泥だらけになつて酷い目に遭つてしまつた」ナンと言ふ。誰も酷い目に遭はした譯ではない、けれどもやはり泥濘に對して腹を立てる。これから梅雨になつて毎日々々

雨が降つて、吾々のやうに安い洋傘を持つて居ると、洋傘の柄がふやけて太くなつて開かない。忌々しいから力委せにやるとビリ／＼と破れてしまふ洋傘を相手に怒つて居る。どうも人間といふものは我儘なもので、人間を相手にするだけではなく、物に對して怒るといふことが能くある。皆様もさういふ事があるでせう、モウ家は一町ぐらゐの所で雨が降つて来る、「モウ少し待つて居れば宜い」といつて腹を立てる。雨の方ではいつ降つて宜いかかわらない、さういふやうに人間ばかりでなく、自然に對して、驕志を生ずる心持がある。だから人に對して忍ぶと同時に、物に對して、自然界の一切の物に對して忍ばなければいかぬ。自分一人で注文して拵へた天氣ではない、いつ雨が降つて來ても、いつ地震があつても仕方がないではないか、といふ心持を有たなければならぬのです。

さういふ寛かな氣分で行きますと、前に申した布施でも持戒でもみな生きて行へる、それで布施を考へ、持戒を考へたら、こんどは忍辱を考へるといふことが必要ナンであります。結局六波羅蜜といふ此の六つのは相持ちのもので、これが揃つて行きますと、洵に日常の生活が氣持快く出来るやうになるのであります。それから「精進」「禪定」「智慧」となるのであります。これはこの次にお話して、それからこの六つを揃へて自分を反省しなければならぬといふ所に進んで行かうと思ひます。

(第十二講了)

(記) (事)

暑い夏のことであつた。ある朝早く、彫刻家の木谷静雲氏が來館されて、深川森下の白畑工場へ修養講話に行つて戴きたい、無論對手は皆若い青年の男女であるから、どうもお坊さんの沫香臭いお話は好くないと思ひますから、その邊は臨機應變に宜しくお願ひしたいといふやうな譯で、早速森下町の神明神社に並んだ白畑洋裁工場へと案内されたのです。

工場主白畑氏は、昨今恰度仕事の方が若干手閑なものだから、この機會に五六日間精神修養の爲め短期講習會を開きたい、而してお天氣が宜しければ日中は男工を海水浴に遣り、女工の方は家にあつて生花を習はすことにして、夕食後に一同集まつて精神講話を承りたいのですが、今日は曇天でもあり早速只今からお願ひ致しますのでございます、最初木谷氏を通じて聞いた實に華も果もある愉快な御申出であつた。

普通の工場經營者とは若干異つたやり方であると思ふにつけ、一體どんな気分の人々か、少しく立入つて聞きたいものと、それから數日間の講話の前後に「チョイ／＼お聞きしたが、聞けば聽く程白畑氏の貴い人格の持主であることに感じて、多分白畑氏には御迷惑のことであると思つたが、耳に残つた二三の點を略記して有志の御參考に資したのであります。

○ 白畑氏は山形縣酒田市の出身である。誰れも若い者が抱くやうに、氏も亦田舎にフラフラして居ても面白くないから、一番帝都へ乗り出してかねて考へてゐるこの修業をしよう、それから知人をたよりに大正八年、二十一歳の時に東京の地を初めて踏まれた。而して希望通り洋服店、銀座の山崎へ奉公されたのである。然るに其翌年になつて幸か不幸か同店内の勞資間に問題が起つて、あまり關知されなかつた同氏も遂に不得已辭去せねばならぬこととなつた。其時支配人からは「君の今日迄の働き振りや、又今度の事件及び將來に關しての抱負は寔に

結構ではあるが、君の前途を思ふ時に、其の身體では(同氏は足が不自由である)寧ろ此際他の職業に轉向するがよいと思はれる」と懇々として情味の籠つた勸告に感激し、其親切に従つて幸ひ本郷眞砂町の大河内洋裁店に世話されることになり、約三ヶ年といふものはみづちりと勉強された。命懸けの努力こそ貴いもので立派な腕前となり、これでこそ一先づ歸省されたが、さて田舎では其手腕を奮ふに充分でないと再び大正十二年九月一日の朝上京して、淺草の知人を訪げ、そこで「ヤレ／＼と晝食を頂かれて居る時に、あの地震火災が發つたものだから、命からがら不自由な足で蹙りながら人込の中を上野指して避難し、不思議にも命拾ひをされたのであつた。

○ ホットすると同時に熱々考へられたことは、自分といふものは何といふ罪業の深いものだらうか、不自由な體の持主は心までも邪推深くひねくれたがるものだが、今この不慮の地變に遇つた幾多の健全な人々も不幸に卒つたのである、そつだ過去の自分といふものもこの自然の偉力に殞れたのである、ヨシ

これからは生れ變つた自分であるぞ! と、過去の種々の荒び切つた氣分を一掃して、それを一轉機として眞に朗かな心持となつて、生き延びた壽命を以て、それこそ更始一新大に健闘しようといふことを深く胸に刻み込まれたさうで、今日でも何かの場合にはこの時の自分を呼び起しては感激を新にされて居るといふことである。

○ さて無一物ではどうにも仕様がなから早速米澤の知人を訪げ、漸く二ヶ月後の十一月に大きな希望を懷いて又復上京し、翌月から大塚宮仲の洋服研究所に教鞭を採ること約一年半、そこで一人では萬事につけて不便であり、不經濟ともなるから郷里に残された夫人を呼び迎えられ、こゝに帝都に於ける新家庭生活が營まれることとなつたと同時に責任は重くなつて來たのである。いつ迄も俸給生活は好ましいことではないと、萬難を覺悟して大正十四年三月、獨立して本郷春木町に戸を備へ、ミシン一台を武器として一年ばかり不眠不休の努力が續いた。「艱難汝を珠にす」といふ諺の通り、人は苦難の生

活中に尊い體驗が與へられる。鐵は鍛えうちて劍とされるのである。

「稼ぐに追付く貧乏なし」白畑氏の夫婦共稼ぎの報は、翌年七月には本所駒形に進展し、ミシンの數も一台又一台を増して漸く八台ばかりと十七人程の若者を遣つて未だ手不足を感ずる程になつて來た、愆うなる仕事の上に益々興味も加はり、彌々發奮する心も増し全力を傾注して活動された。この時代の話を読まれた白畑氏は感慨深さうに、紅潮した顔色で、實にその時分のことを想へば種々辛いこともあり、又楽しい事も澤山にありました、而して約三年間に小一萬の貯金も出來ましたが、併し私共の台所には米櫃一つないといふ貧弱さで、日常生活のことより専ら仕事の上は一切入れ揚げて居ましたから、身の廻りは極めて簡單であります、今でも御覽の通り着物も道具も寒暑を凌げば足るといふ状態なんですしてホントニお羞かしく思ひますと、事業本位で奮闘されて居る。併し今回聊か感ずることあつて需めたといはれるお佛壇は、廣い疊敷の座敷一面仕事場の上座に輝かしい光を放つてゐた。

現在の場所へは昭和三年六月に引移られたので、この建物の中に徒弟は皆一緒に起臥し、食事を共にし、仕事にいそしみ愉快さうに見受けられた。

次に白畑氏の處世觀を、同氏の口をかりて記してみませう。

私の今日迄の淺い體驗から申すのは洵に慚愧に堪へないのでありますが、折角のお求めですから一言述べますと、總て仕事をするには自分といふものがあつてはいけない様です、我を無くして人々の爲めによかれかしと盡して行くのです。私は以前人に備はれた經驗もあります、人と共に仕事をする上に於て、決して自分だけが抜けがけの功名をしようとか、うまい汁を吸はうとか、獨占的な利己心を出しては乾度よく行きませぬ、自分といふものを捨て、かゝる所にすべては圓滿に運ばれて参りました。今私共の手許に數十名の男女の徒弟が居りますが、これは決して他人ではない皆自分の可愛い子供だと思つて世話して居ります故か何も問題は惹きませぬ。尤もこの大勢の中へ一人でも變な思想の持主が混入

いのです。

同業組合の相談會に於ても、こういう經濟状態では品物の値上げをせねば困るといふ問題が出来ます。私はお互に能率の増進を計らうではありませんか、能率さへ増加されると算盤は持てる筈です、譬へば一日に十二枚より出來ないと計算せるものが、遣り方で同時間に三十枚も四十枚も仕上げられると、少々の値上げよりも遙かに利益は擧げられますから、さうしようではありませんか、出來るものを出かさないで済ませようとは相濟まぬ譯でもあり、お互この方法をよく攻究したいものでありますと主張して居ります。随つて私は平常から寢ても醒めてもこの點を考へて、どうすれば一番能率が高潮され得るかど研究に没頭して居ります。

して來れば、それを災難で、その一人の爲めに全部が亂されて來ます、ですから新規に備入れる時にこの點は充分注意警戒致します。

それから私は最初の間は仕事の効率をあげようと思つて、毎朝工場内を巡視致しましたが、ある時不圖感ずることあつて以來は一切廻らぬことに致しました、その當座は少し成績は下りましたが、更に考案を致しましてからは能率が大に増進致しまして、他の同業者と比較して約三倍位の優秀を示して呉れて居ります。尤もこの仕事の能率に就ては徒弟の部分々々仲間の組合せ方が一番大切であります、一例を申せばこの冬にも二百五十着のオーバが三日もかゝると申しますから、そんなにかゝつてはと私は旅行から歸宅した時でしたが、早速其の組合せ振りを一瞥して、其の配置方を若干變更しましてやらせませうと、同じ人數で、同じく働いて居ながら、しかも其れ丈けの數は一日かゝらずに立派に仕上られて、皆がアツと驚いたのです、これは慢心で申すのではありませんが、その間の呼吸さへ會得せば誰でもやれますので、出來る丈け恣様な具合に遣つて頂きた

白畑庄太郎氏は當年三十六歳の壯年で七十名の若い男女の徒弟を一家族制のもとに、異體同心となつて仕事に全精神を打込んで所謂仕事に同化されて居る。而していつも微笑を含んで數年來一度だつて聲を荒らげたり、怒つた顔を見た者がないといふこ

とである。

勿論白痴氏にしても生れ乍らの悟者ではない、こゝまで来る裏面には涙ぐましい陰れたる効績が秘められて居る。五體不具の夫君をして今日あらしめたものは、實にその夫人の内助の偉力に思を致さねばならぬ。「箭の走るは弓の力、男の仕業は女の力なり」或は「男は羽の如く女は身の如し、羽と身と別々になりなば何を以てか飛ぶべきと」日蓮聖人は仰せられた。大事な兩足が不自由な夫君の代理として或は嬰兒を背に車を曳いたり、或は澤山な品物を運んだり、或は多人数の賄方や、衛生に注意を拂つたりして不眠不休で、二人三人分の活動をされた血の泌じむ時代も相當永い間續いたのである。その爲め遂に健康も害せらるゝに到つたことを漏れ聞いて嗟歎の聲を禁じ得ない、ア、日本婦人の貴さは爰にあるのではないでしようか。

圓筆に際して一言させて頂くことは、かゝる人格の人達が、其の純朴さを以て質直に正しき宗教の信仰を基礎とされる時、倍々重疊する人生のこの荒海

を勇敢に突破し、歎んで國家社會に貢獻さるゝことのヨリ効果多きを確信する者であります。至囑々々
(紙面の都合で今日迄延びたことを陳謝します。滿生)

小林一郎先生著

法華經講話

第二輯

定價 金五拾錢
送料 四錢

お待ちかねの本が出ました、
賣切れとならぬ内にお早く！

申込所

財團

統

一

團

振替東京九四二〇番
電話牛込五三三六番

『皇道と日蓮主義』を讀みて

上 田 辰 卯

本園講師河合陟明君が、今回『皇道と日蓮主義』といふ本を著述された。事變以來著しく日本思想界に進出し來つた皇道なるものゝ内容が極めて明確に説き盡されてゐるので、まだ本書の印刷にかゝらない以前から精讀して頗る共鳴してゐる譯であつた。

明治の末期から昭和の初めにかけて日本へ侵入して來た社會學は、いふ迄もなく獨逸の學派と、露西亞の實際派によつて指導された社會主義である、彼等は洋の東西を問はず又その國の歴史的变化も地理的人種的の相違も顧みることなく社會を判然たる上下二段に區分して只管反日闘争を使曠した。經濟的に不遇なる勞働者、現實に闇い學者、社會の實相に無經驗な學生、此等の人々は悉くこれに魅せられて、一日の中にマルキシズムの聲を聞かざる日なく新聞に勞働争議の記事を見ざる日はなかつた。かくして日本の産業界は萎微沈衰し、社會の統制は亂れ

教育の機構は混亂し、終に我國の唯一の牙城として世界に誇つた陸軍海軍の内部からもその徒輩を續出して軍規官紀さへも疑ぐらるゝに至つた。二千餘年の歴史がマルキシズムの脚下に蹂躪されると嘆じたのはたゞに固陋なる國學者のみではなかつた。

併しながら日本は矢張り神の國であつた。光輝ある日本文化の清流は決して彼等徒輩の如き者に覆滅されるものではなかつた。滿蒙一發の銃聲續いて日支兩國間に捲き起つた戦雲はたゞに日本國民の情眼を破つたのみならず、過去二十年漸く日本國民の頭腦に巢喰つた社會主義的思想の精華を餘義なくせしめた。夢の如きインターナショナルの空論は、祖國日本の存亡の前には朝霧よりも淡く消え去つた社會主義なるものゝ内容が一逼取るに足らざる空理空論であつたことは、非常時といふ一ツの事實に直而して全國民に教へずして自ら知らしめた。社會主

義思想を指導した巨頭は相次いで轉向し、餘程の鈍間にあらざる限りマルキシズムにこびりついてゐるものはなくなつた。

この時に代つて日本國民の頭に廻り來つたものは即ち『皇道』である。日本固有の精神、日本國民本來の面目、これによつて過られた日本の思想界を是正しやうとする氣運が期せずして諸方から起つた。最近の佛教復興の運動も即ちこの餘波に過ぎない。蓋し日本の文化といふものは、神儒佛三教以外の何物でもなく、その中でも佛教は深く永く國民生活の内容を形造つた思想であり、これを識らずして日本を知ることが出來ないからである。

皇道が維神の思想であることを知らぬものはない寧ろ多くのものは皇道とは即ち神道であると考へてゐるだらう。然しながらそれは大いなる誤りであつて佛教こそその内容の大部分を占めてゐるのではあるまいか。かゝる誤謬は畢竟淨土教の厭世主義や、禪宗の脱俗思想の禍から廢佛毀釋の壓迫を蒙り、佛教なるものが日本精神と相容れざるものゝ如く現代人に考へられてゐた爲めに過ぎないのであつて、一

度日本の文化の歴史を繙いたなら、かゝる誤りは忽ち掃蕩されるに違ひないのである。日本の歴史から佛教を控除して果して何が残るか。佛教によらざる日本精神とは何を意味するか、かゝることを至公至平に考へたなら何人にも了解出來る筈なのである。皇道思想が今日日本國民の間に廻り來つたことは誠に喜ばしいことである。たゞ恨むらくは皇道なるものゝ内容が未だ闡明されず、中には極めて曖昧不透明な思想をもつてそれであるかの如く説くものゝ少くないことである。或は政治的にファシズムに利用せんとするものがある。或は經濟的に社會主義否共產主義に合流せしめんとするものがある。かくの如きは何れも皇道の名を借りて國民を迷はさんとするものであつて、斷じて神聖なる皇道ではない。河合君がこの點を最も明瞭に、最も神聖に説明せられたことは喜ばしいことであつて、日本皇道史のため、に實に偉大なる功蹟と云はねばならぬとおもふ。敢て廣く好學の士に薦めて一讀を希ふ所以である。

貴族院議院 佐藤鐵太郎閣下 題辭
海軍中將
貴族院議員 井上清純閣下 序文
男爵
統帥 團長 上田辰卯居士 序文
理事

皇道と日蓮主義

文學士 河合 陟 明 著

菊版上質 二三五頁 定價壹圓 (送料負擔)
團員及學生特賣中半額

井上閣下序文の一節

予が同門の篤信學者河合陟明氏深く世態を憂ひ、一片の道念默止し難く、慨然筆を呵して本書一卷を著述せらる。高き尊皇愛國の至誠と深き崇神信佛の信心より湧出し來りて、言々愛國の響があり、句々信仰の涙があります。朝々として諷詠すべく、潜々として著者と共に泣くべきものがあります。

本書は無上正法の一實國家に冥合して内國民の人格を薰化し、國家の理想と實力とを整へ、外人類の幸福を保障し、文明の完成に寄與すること日の東方に昇りて西を照すが如きを信知し、「一身徧く悦び兩眼瀧の如し」と感激せられた日蓮聖人と血脈相通じたる血涙の文字であります。轉輪聖國の靈力と最勝經王の妙化に感觸せんとする凡ての人士の切に熟讀玩味を俟つ次第である。

目次

第一章 皇道精神に就て 第一節 皇道復活の曙光 第二節 皇道の内容とその運用 一、皇道の宗教性—慶を積む大平和主義— 二、皇道の中軸とする文化的發展—軍を重ねる大進歩主義— 三、皇道の世界に及ぶ徳化—正を養ふ大統一主義— 第三節 皇道の思想的根柢に就て 第二章 日蓮主義信仰内容と皇道 第四節 日蓮主義の國體觀 一、佛教の國家的大教義 二、轉輪聖王の理想 三、國家七不衰の法 四、戰爭に關する示教 五、平等思想と勤王 六、佛陀の明教と皇國の使命 七、國史と佛教 八、日蓮聖人の勤王 九、法華經に顯されたる宇宙國體の思想 一〇、法界(宇宙)は本佛の威徳を中心とする一大國體なり 一一、國史を通觀して皇道擁護の名教を確立せよ 第六節 本佛の人格實在と感應の妙義 一、本佛の相好實在論 日蓮聖人の示教 二、本佛の大神秘 三、日蓮聖人の信仰體驗 四、人生活動の靈源 第七節 本佛を根源とする文化の統一—統一神教の理想— 一、佛教信仰の統一 二、汎神論と一神論との統一 三、人文史上に於ける佛教の統一力 第八節 本佛の靈光と皇室の御稜威 一、皇道の淵源と本佛の靈徳 二、祖宗の神靈と天皇の御稜威 三、日蓮教學の本尊に顯されたる皇國の使命 第九節 信仰の社會的實踐と現實的國家生活 結論 日蓮主義の立場より皇道を讚美して國民に激す。

發行所

東京市小石川區音羽町六丁目十七番地

財團法人 統

團

振替東京九四二〇番
電話牛込五三三六番

教 信

本部 團報

法華經講座 先頃ある讀者から「人は老少不定で出づる氣は入る息を待つことなしだから、早く法華經の一番よい所を講義して戴きたい、あとはボツムでも宜しいから」との申出があつた。然るにこの肝心な毒量品に到るには矢張りその順序がズツと調つて來れば眞の感徳は起り難いでしょう。お經文は論語や他の聖書と異つて始中終一貫してこそ始めて寔に有難い佛様の大悲大慈の御心が現はるのであります。こゝが中心だからと眞中から一品を抜き出してもこれを敷衍するには矢張りこゝに來るにはこゝなつて、それから悠ううだといふ具合に説くことにならねば、根本からの理解は得難いでしよう。唯だその前後の説明の繁組はありとすると、順序は順序ですから、このことは講義の當初に小林先生より懇説された筈であります。

兎も角十一月よりは本門に入りましたから萬難を排して御來聽あらんことをお薦め申します。
日曜日集會 日蓮聖人が「行學の二道を勵み候べし、行學たへなば佛法はあるべからず、行學は信心よりおこるべく候」と仰せられて居る。法話を聽聞すること素より大切でこれ學であるが、更に皆一堂に會して動行をいそしむこと自ら信心増進の要道とされて居る、行と學の二道が一方にのみ偏しないやうに致したいではありません。

か。本部毎日曜日の午後二時より四時三十分まで左の通り修法後法話があつた。
十月二十八日
十一月四日

人格完成への経路	立國安國論講義	職部 滿事氏
人生の第一義	正義の源泉	山口 智光師
同 十八日	軍人勸諭と法華經	職部 滿事氏
同 二十五日	大藏經要義講話	和賀 義見師
滿洲を巡りて	精神日本の再建	中村 浩一氏
		梶 木 顯 正師
		伊 東 竹 三 郎 氏
		山 口 智 光 師

横 濱 教 誌

當地、十月中の集りは、左の如くであつた。
○七日 夜 神奈川區藤原町佐藤氏方にて。「信仰と天災」
職部先生
○九日 夜 磯子高橋氏方にて。此夜小西師を御導師に、和賀師も御参加あり、當地會員全部が一堂に會して、職部先生のなき御令聞、大願院建立妙護日常教女のために、御回向申上げた、讀經唱題の終つて後、兩師より御法話があつた。

○十六日 夜 神奈川區愛町石毛氏方にて和賀師、東京より御來講。

○十七日 晝 中區壽町の長久保氏方にて、夜は引續き神奈川區旭ヶ丘岩井氏方にて小西師の御法話。

○十九日 夜 神奈川區三ツ澤下町岩上氏方にて、小西師の御法話。

○廿三日 夜 磯子町北山氏方にて、「信念受持」磯部先生。

○廿七日 夜 神奈川區三ツ澤下町齋藤氏にて、小西師の御法話。

○廿八日 此日は磯部先生御長男の大祥忌に相當する。神奈川區子安町淺野中學校脇の供養塔前に會員一同、午前九時半に參集、磯部先生御家族を中心に、小西師を御導師として、秋晴れの日の元に臨地御回向をした。和賀師も御參加された。

寄附金維持及團費誌料領收

(自十月二十一日至十一月二十日)

一金四拾八錢也	大阪山乃神傳道閣殿
一金貳圓貳拾錢也	岡山 橋原 亮治殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉 伊東梅四郎殿
一金六圓也	小高 典吉殿
一金貳圓五拾錢也	横濱 川嶋 清稔殿
一金貳圓貳拾錢也	神奈川 田澤 留吉殿
一金貳圓也	東京 佐藤 和市殿
一金拾圓也	同 和賀 義見殿
一金壹圓貳拾錢也	大阪 澤田萬壽總殿
一金貳拾壹錢也	東京 森 義男殿
一金貳圓四拾錢也	彦根 林田 義夫殿
一金六拾圓也	横濱 中村清兵衛殿
一金五圓也	東京 山田 英二殿
一金貳圓五拾錢也	東京 松岡フユ子殿
一金貳圓也	同 沼部彌太郎殿
一金壹圓貳拾錢也	静岡 小澤 眞樹殿
一金貳圓貳拾錢也	神戸 延廣 純靜殿
一金壹圓拾貳錢也	西宮 岸 邦太郎殿
一金參拾圓也	栃木縣 和泉桂之輔殿
一金貳拾圓也	東京 柴田 武治殿

一金貳拾圓也 東京 井上道太郎殿
右難有入帳仕候也
財團法人統一團會計

念 告

從來本部に於ては正團員も單なる本誌購讀者も同一金額を以て御清撥相得き居申候處彌々時代の趨勢に鑑み爰に本團は先づ本誌の増大を圖ると共に正團員と誌友とを區別すべき必要相逼り申候に付本誌巻頭略則御承の上爲法國爲一切來生可相成團員として何卒御費賜あらんことを偏に奉願謹候

財團 統一團

本多日生上人著書 特價提供

- 一 聖 語 錄 改 版 特價 全 金壹圓八拾錢
- 一 日蓮主義本領 特價 全 金貳圓拾錢
- 一 法華經要義 賜天覽 全 金貳圓五拾錢
- 一 日蓮主義心髓 全 金壹圓五拾錢
- 一 日蓮主義精要 全 金貳圓九拾錢
- 一 佛教の本質と其價值 全 金貳拾五錢
- 一 法華經要品 全 金五拾錢
- 一 日生上人レコード 全 金參圓廿五錢
- 磯部滿事謹輯 全 金壹圓七拾錢
- 一本多日生上人 全 金拾錢
- 一 勤行作法 全 金拾錢

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團 統一團 出版部
東京市小石川區音羽町六ノ一七
振替東京一〇九四〇番

一月「教」誌 定價一冊 金五拾圓貳拾錢
送料共 金壹圓貳拾錢
一ヶ月前金 金壹圓貳拾錢
送料共 金壹圓貳拾錢
申込所 振替東京一〇九四〇番

統一團 定價 一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注 意
▲▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和九年十一月廿四日印刷納本
昭和九年十二月一日發行
(第四百七十七號)

不許複製
編輯兼 磯部 滿事
發行人 鈴木 日雄
印刷所 都 印刷所
電話 藥輪六〇二四番
東京市小石川區音羽町六ノ一七
發行所 財團法人統一團
電話 牛込五三三六番
振替東京九四二〇番